

325

232



始



2.1128



三磨地

大正
3. 10. 23
内交

はしがき

あめつちのうちにいきとしいけるもの、とりげもの、むしけらよりひと
にいたるまでこのよにうまれきてしにゆくまで、ひげなにごとをめあて
にしてゐるかといへば、みなくるしきわざはひをのがれ、たのしきさいは
ひをえんとめあてをもていきてゐる。だからおほくもつひとも、く
らゐたかきひとも、よになだかきひとも、ひろくまなべるひともあけ
くれなんらかのくるしみ、なやみをもたぬはまことにすくない。
しかるにこれどさかさまに、たからもたず、くらゐとてもなく、ほま
れもあらず、まなびもしらず、よにじつとさげすまるゝひとびどのう
ちにも、なんらのくるしみをおらはず、やすらかにたのしく、いのちをおく
るものはある。

はしがき

なにゆゑかくのごときちがひができるかといふに、かみにいふひとはまづたくまよひのうちにとぢられてゐるのである。そのまよひをぬけいでぬかぎりはしぬるいまはまだまことのやすらけきたのしみはえられぬ。

ひとがかくまよふとはいまはじまつたのではない。おほむかしからひととしてはおほかたはまぬかれぬわざはひであります。このまゝすゝめばとほからぬうちにわがくにはほろびてしまひます。

このまよひさへぬけいづればたれでもいまいふていまからこよなきおほきなたのしみがえられます。そのさいはひをうるにはたからもいらぬ、くらのもいらぬ、ほまれもいらぬ、まなびもいらぬ、さかしさもいらぬ、やまひにかゝるひとまでやすらかにたのしいさいはひをうるのとたしかにできるみちがある。そのみちはいまはじめてつくられたのでは

ない、おほむかしよりあるみちであるが、ひとはとかくそれをふまぬ。さればそれはふみいりがたきむつかしいみちかといふに、そんなものではさらさない。きはめてふみいりやすきみち、しかもやすらかにたのしくあるけるみちで、けけしいさかみちや、おそろしいたにはない、いざりでもあるけるみちである。しかるによのひとこのみちをたごらず、むつかしきくるしいみちをたごり、いまはいよ／＼まよひてます／＼ふかいたにまへおち

いるものがよにおほくできた。まよひはおそろしいものであります。よのまよふひと／＼にまをします、まことのたのしみをうるたひらかなふみやすいみちがあります。それはさき／＼またさんまぢともせんとも

まをします。せんといへばせんシユウのせんでむつかしいものとおもふ

ひどもあらんか。こたへてまをします、それもひとつです、けれどもせんが

はしがり

あります。そのことはこのかきものうちでくはしくときあかしますが、いまひとことまをしおくことがあります。いまわがくにのせんをかたるひとは、むつかしいとをささるものでなくてはせんをさむるとはできぬといひます。もししかあらばそれではをしへとはなりませぬ。をしへはやすきものでなくてはひろくひとをよきみちにいらしむるとはできませぬ。しやかむにはおほきななさけあるほどけであつた、からいかなるものをもささらせておのれとおなじほどけにしたしとのねがひをもつてよにいでられた。それゆゑそのをしへられたせん、さんまちにはこゝろさときひともささらぬひともたやすくはひりうるためそをうるてだてをいろ／＼さづけられました。さときひとのみをめあてとするみちはひろくよのひとく／＼をすくふみちではない。みちとはたれでもたやすくふみゆくそのできるものでなくてはならぬ。ささらぬものにこそみちをさ

きかしささらせんとしてほどけがでられたのであります。

こいふわけであるからそのみちをしめすにもたやすくささられることばでいふとをもつとめねばならぬ。しかるにわがくににつたはるほどけのみちがおほくのひとにはよみがたきシナモジ、シナことばでか漢字 漢語いてある。それがためあたられたからのもちぐさらしとなりて、たふときみちもあやまられ、おほくのひとはまよひにまよひをかさねてゐるがいまのありさまであります。なにもしたらばこれをすくふとができるかといま／＼にさま／＼かんがへました。ほどけのをしへをよみにくきモジとことばでかいてあるを、やすきわがくにことばにかきなほしたらばよからんとはおもへども、かすおほきかきものとてもいまいふていまかきなほすとばならぬ。そこでほどけのみちしるてだてをたやすきことばでかいてみるとおもひこのかきものをするるといいたしました。

いまのわがくにのふみかくふりとはまつたくことなるさまにかいて
 みました。よのひとはたゞひとわらひにして、てにもふれぬかともお
 もひます。そらみつやまどのくにはすべがみのいつくしきくに、ことだ
 まのさきはふくにとかたりつぎいひつがひながら、するところはまつたく
 それとはちがひ、くにことばはせまくて、ことたらぬとて、ほかのくにこ
 とば、すなはちシナことばでなくてはよもあけぬとおもひ、なにごとを
 いふにもわかりがたき漢語シナことばをもちゐる、からくにことばはひに／＼
 わすれらる。しからばまこと漢語シナジ、シナことばがたやすくまなばれ、たやす
 くよまる、かといふに、ひろきよのひ／＼はやはりかきがたくよみがた
 しとしてゐる。しかしてわれらがつかふシナことばがいまのシナ支那のひ
 とにきくわけらる、かといふと、すこしもわからぬ。そんなものをよい
 とおもふはなにゆゑであるか。このむつかしいものをひ／＼あつかふに

はおそろしいてまがゐる。そのひ／＼のできごとを、はやくよにしらす
 にひぎ、にもシナジ、シナことばをくにことばとませてかき、それではわ
 からぬからさらにまたふりがなつけておなじことをかいてある。ふたへの
 かきものをせねばおもひをひとにかよはせぬとはなさないことであ
 る。しかもシナことばにシナひ／＼きをかなでつけてもシナことばになら
 ぬものにはやはりわからぬ。かくのごとくふたへにかいたかきものはい
 づくをたづねてもわがくにのほかにはありません。それをあやしとお
 もふひとのなきはまたおほいにあやしいとである。それがためをさな
 ごをしふるまなびのそのからそのうへのまなびのには、にても、をしへの
 おくるゝとはひととほりではない。かういふわれもこのかきものをそれ
 とおなじくふたへにかいたてかすのかゝると、このうへもなし。よのなかに
 すむうへはこんなまよひにもつきあふてゆかねばならぬとは！ よううつ

ば、あめりかそのほかのくにぐのひとがわがくにのかきものをおほくよまず、したがふてわがくにびとのまごゝろがむかふにかよはぬこととなり、いろくのわざはひもそれからおこるをくにびとがこゝろつけずにあるよはひらけたといふが、なにをくるしんでむつかしいモジ^字ことばをたよりとせねばならぬか。このことはひさしきまへよりよのひとにまをしもしてゐるが、それにこゝろかたむくるものがきはめてすくない。かくはいへどもシナジ、シナことばをまなぶべからずといふのではない。よろろつば、あめりかそのほかでもむかしのらてん、ぎりしやまたいんごのむかしのさんすくりつと、ばーりいことばやかきものをこゝろざしあるひとはもつばらしらべるごとく、いまわがくににふるくかりもちゐるシナことばまたそのかきものをもつばらしらべんとおもふひとはそのひとのまゝであります。いまでにこのことはくごくよになへたが、いづれをりをも

てまたこのことをよにうつたふることにいたします。こいふわけもあるからひとのわらひもかまはず、このかきものにはシナことばはゆびでかぞへうるばかりきはめていさゝかをもちゐましてそのほかはみなくにことばのみでかきました。シナことばをくにことばとおもひ、くにことばとシナことばとのけぢめをしらぬいまのよであるから、それもあきらかにせんため、やむをえずシナことばをシナひいきでよむばあひにはかたかなでふりがなをつけました。かくまをすこのかきものまきはじめよりおほりにいたるまでシナことばシナジがおびたしくつかふてあるではないかどどがむるひとがあるであろう。こたへてまをします、そのことくくのシナジはシナことばでよむのではない、わがくにことばでよむこととし、またくにことばおよびシナのほかのくにことばはみなひらか

なでかいてあります。くにことばばかりでかくからはまつたく漢字シナジをもちゐず、ひらかな、かたかな、さてはろうまがなでかくのがよいのである。かしどもかくこのはしがきのさまにならひかなでくにことばをまんなかにかけシナジをさきん、そのひだりがはにちひさくかくつもりであつたが、よのならばしがならずであるからしばらくよのふりにまかせシナモジをおほきくしました。けれどもまことほみなくにことばでよむことにしてあるからちひさきかなではあれどそれがおもなるよみものでシナジはそへものとしてつけたのであります。

かくまをすわれはひとりではシナジはきはめてたのしみとし、ふる漢字きひとのかいたかきものをこのんでみもします。またわれもときにはひとり漢字をなぐさめんとしてからのかみおしひろげ、からふで、からすみもてシナジかき、へたながらかきなすりてたのしむともある。しかしそれはう

つくしわざとしてたのしむので、よのたしにはならぬ。よのためにはわがたのしみをいひはるべきわけはいさゝかもあつてはなりません。われもをさなきときよりもちゐられた漢字シナジをいまとりさられてはたよりをうしなふとはもとよりである。けれどもそれはつまりならばせでわがまゝかつてといふものである。すこしなるゝときはかなもろうまがなもおもふまゝにかけます。わがこのかきものはみぎにまをすごとく、くにことばのみでかいてある、からよむひとはよみにくしといふであらうが、それがためシナジをもちゐてふりがなをくにことばにしたのです。よみぐるしくはありましようが、すこしよみゆけばなれてよくわかることとなります。

くにことばのみでかいたといふからはうるはしいやまことばでかいたかのごとくいひふらすとおもふかたもありましようが、そいふとはわれはしがき

にはとてもできません。たいひろくひとくにわからせたいから、ひたすらむつかしくならぬ。このみにこころをとられ、うつくしいことはつきなごかんがふるひまもなきま、つねくくちにするひなびことばをつらねたにとまります、からくちすべりあしきものであるとはもとよりであります。よむかたもさぞよみぐるしくありましようがわがこころざしのあるところをくみて、およみくだされ。はしがきにはつりあひあしきことをまをしましたが、わがおもひをときあかすためとおぼしめさんといのりです。

大正三年ふみづき

平井龍華しるす

三摩地目次

文明は幸福を與ふるか 一

知識、智慧、學問は幸福を與ふるか 一三

智慧、學問教育の祟 二六

人は五官を頼とす 四二

人は眼に騙さる 四三

人は耳に騙さる 五八

人は鼻に騙さる 六二

人は舌に騙さる 六五

人は身に騙さる 七三

人の所謂心(意)と真心 七七

三摩地目次

淨と不淨……………八一

肉食……………九五

動物と其食……………九八

肉食せぬ動物

馬、牛、鹿、兔、栗鼠、猿、象、犀、駱駝……………九八—一〇〇

肉食動物……………一一一

狼、狐、熊、豚、猫、獅子、虎等……………一一三—一一八

食物と道義心……………一一八

恐しい人心の起る原因……………一二九

禪—禪那—三摩地(三昧)……………一三六

禪の方式—身體の態度……………一五〇

繫念……………一五三

安那般那念

數息……………一五八—一六二

隨息

世尊安那般那を教ふ……………一六三

念佛、觀佛……………一六九

日想觀、水想觀……………一七三

念法……………一七六

不淨觀……………一七七

慈悲觀……………一七九

因緣觀—我……………一七九

公案……………一八六

禪を修むる心得……………一八九

三摩地目次

三摩地目次

止観……………一九一

禪の障(蓋)……………一九七

五障||貪欲……………一九九

華奢……………二〇三

瞋恚……………二一九

昏沈、睡眠……………二二〇

掉舉、惡作……………二二三

疑……………二二四

觸……………二二五

三摩呬多等引……………二二八

三摩呬多靜慮四禪……………二三〇

八解脫……………二三五

三摩地||等持……………二四〇

四無量定……………二四五

二種禪

一分修三摩地……………二四八

三種禪

喜俱行三摩地……………二五〇

樂俱行三摩地……………二五〇

捨俱行三摩地……………二五〇

佛般涅槃の時の禪定……………二五二

菩薩……………二五四

菩薩の修行……………二五七

三摩地目次

三摩地目次

六波羅蜜多……………二五八

菩薩の禪……………二六四

禪波羅蜜多……………二六四

入定、出定……………二六七

神通力……………二八八

日本根本發生の宗教―役小角……………二九二

六神通……………二九六

羅漢神通力に依て長者を誘導す……………二九八

大通智勝國師……………三〇〇

分別心―心の不自由……………三一〇

羨は分別心より出づ―天職……………三一六

無分別心―自由心―不思議心力……………三二九

人以外動物の不思議心力……………三三二

人の不思議力……………三四一

科學者の不思議力研究……………三四九

吾實驗……………三五一

ぞろあすた―現る……………三五一

土耳其の旗を現る……………三五三

農科大學生現る……………三五五

眼鏡蝶蜂蜻蛉と觀らる……………三五八

地震前知……………三六三

大筆を觀る……………三六五

亡母と語る……………三六九

繼母の死豫知……………三七七

三摩地目次

三摩地目次

幻の筆畏多き事を豫報す……………三七九

幻の時計恩謝を豫報す……………三八一

横村男爵に紫雲吉徴を示す……………三八五

三摩地治病―老人の火行……………三八六

目次終



心身三修養

摩地

沙門龍華著

文明は幸福を與ふるか

人と云ふ人にして此世に生長らへる限り苦無くして只樂のみ有らんとを願はぬ者は無い佛菩薩に至る迄此願に變りは無只違ふ處は佛菩薩の苦は凡人の思ふ苦とは同じからず其樂も亦凡人の樂とは同じからず佛菩薩は凡人の苦と見るとをも苦とせず樂と見るとをも樂とせず其願ふ處は一切有情が苦むを見て只管それから救ひ出して樂を與へ度と云ふが願ひでそれが出来るを樂とするけれども凡人が佛

文明は幸福を與ふるか

菩薩に成上る迄は、さう云ふとは望まれぬ。そこで先づ凡人は今の苦を解脱して樂に至ることを勤めねばならぬ。

凡人の苦樂とは如何なるもので有るか云へば、一口に申さば、諸々の禍難に會ふとが苦で、所有幸福を獲るとが樂で有る。然らば其禍難とは如何なる者かと云へば、それ逆も數へるとは出來ぬ。幸福も亦量るとは出來ぬ。殊に人々に依り禍難と幸福とが皆違ふ一つの事が此人には禍難と思はれても、彼人が見れば、それを幸福とするのが有る。しかし概べて言へば、凡人には何れにも通して同じ禍難幸福が有る。

人としては一人も免ぬ禍患は、壽命が常磐に續くことが出來ず、遅かれ速かれ、此世を去らねばならぬ時が來る。それを悟れば、何でも無いが多くの人は皆夫を苦として心を痛める。又病は死ぬとに次での禍患で、壯健な人は死ぬ迄此患に罹らぬ者も有るが、何かの時に大傷など受けて

苦むも有る此等は皆身體の上の禍で有る命が惜いと云ふとから苦とする。如何に常には勇ましく見えても、いざ命取と成れば、それを苦と思はぬ人は少ない。そこで命長く病や傷に罹らぬとに心を碎くが、概ての人の煩惱で有つて、それを免れる爲には千種の事を爲て遂には深き迷に陥る。

身體から來る禍患は、此外に無いかと云ふに、そでは無い。心から來た禍患は量る可らず多く有るが、夫を其原因に溯ると、矢張身體から來て居ることが判る。心から來たと見るは誤で有る。今其事を次に説きます。
心から來る苦と見ゆるものを言へば、右に申す通り、無量有る先づ著るしい處から申せば、如何したら誰某の如く美しい衣服を着ることが出来るか、如何したら日々美味き物を食ひ得らる可きか、如何したら某の如く日々遊び暮すことが出来るか、如何したら何某の如く美しき家に住

文明は幸福を與ふるか

めるか如何したらば、外行くに馬車自動車に乗れる身となれるか、如何したら世に珍重される身に成れるか、如何したら世に出で大きな勢力を振ふとが出来るか、如何したら高い位地に登れるか、如何したら大名譽成れるか、如何したら大豪富となれるかと云ふが如き世間の利益名譽を得るが幸福で、それを獲んどの貪欲の心は日に夜に激しく起りて、心の安まる暇も無く、一つにも二つにも爲る事、作す事、此外に無きは普通の人間の脱れぬ煩悶で、斯の如き事を仕遂げざるは不幸で有ると思ふて生涯それに心を悩ますとが大きな禍難とは心づかぬ其原因を尋ぬれば前に云ふた通り、矢張吾身體の幸福を得たいとの望から出たのであるから、此身が禍患の原因で有ると知らねばならぬ。

又人と人との間から起る苦が有る、親子、同胞、夫婦、親屬、朋友、其他人等との間には色々入込んだ煩はしき事が起る、それを吾身勝手に先

れば、吾のみ好せんとの欲望が出て、それが得られぬ爲め、明ても暮ても心の樂みは無いついまり是も吾身體が原因と成つて、自から禍患を求め苦を招くのである。

そこで如何したらば此等上より云ひ並べた一切苦を脱れ、樂を得られんかと、煩悶えて幸福の來る折は無い、迷ふ哀しさに苦を脱がる、道は心の据ゑ方に在るとは思も寄らず、矢張り形質の上に救を得んと欲する念盛んにして、先づ吾身を損なふてはならぬ、有る物を減し又無くしてはならぬ、無き物は取らねばならぬ、減る者は増さねばならぬと云ふ考が先立つが凡人の習慣で有る。

凡そ世の苦、樂、禍患、幸福は上に陳た如き事の外ならず、富と言ふ形質と言ふ形質有つ人にしては、形質の上に何等の苦は有らざるべし、人は思ふで有らうが、さうでは無い吾身なる形質、吾持つ形質の物、得

文明は幸福を與ふるか

んと欲する形質失ふを欲せざる形質が色々有りて形質には苦少しも
關からずと云ふ可き禍患の有る可き筈は無い何故なれば人間苦と云
ふものは形質の上に有る人は其形質に執著て離るゝとを得せぬ間は
苦を脱けることが出来ぬ。

然るに人は眞の幸福眞の樂は形質を全く離れて始めて得ることが出
來ると云ふを知らぬから形質より外に眼を著けぬ今や世は文明と
なれりと云ふ見よ今の文明は形質の文明に非ずして何ぞ人は之に依
て眞の幸福を得んと夫のみに心注いで居る果して是により人世が益
益幸福になるか如何か少しく其文明なる者を研究めて見ましよう。

文明開化とは近代に歐呂巴亞米利加其の外遠き國々と廣く交通り
始めて以來流行した語で有る其心は如何にと言へば「文」とは文書又
「あや」の心で世間に人の爲業の文も明か文書にも明るく成て多くの
人

人學びを觸み凡ての事が分早解り暗夜で物知らず居た國民が光明の
中へ出で今迄とは相變りて化て來たと云ふ心を表はしそれには人々
が皆幸福を増したと云ふ心を含んだ語と人々は考へて居る。

果して吾國今の状態は其如くなつたか幸福を増したとは如何とを
指して云ふか幸福とは色々有る金銭が多く有るが幸福で有ると思ふ
人も有る金殿玉樓に住まひ綾羅錦繡を身に纏ひ山海珍肴に喉を潤
すを幸福とする者もある位高く名聞え權威赫々を幸福なりとする者
も有る吾身の榮華は少しも思はず他の人に善きと仕向けるを此上無
き幸福とする者も世には稀に有る文浮世の所有事物を厭ひ人跡絶た
奥山に只獨己閑寂を樂むを幸福とする者も有る斯う云ふ二人は固よ
り他の者とは幸福の目的が違ふからそは爰に沙汰する限で無い世の
多くの人は皆形質を見ねば幸福とは思はず此外に遙に勝れた幸福が

文明は幸福を與ふるか

有つても、それを知らず、死んで行く迄形質の外、幸福は無いと思ふて居る。

哀れなるは此等形質に感ける人々なり、生命有る限り、起ても寝ても形質に迷ひ、之を吾物にせんと心を燃し、息の根滅える迄苦み惱み、到頭の局眞の幸福を得ず、死ぬる今際も此世を捨るに忍びず、心残りの操言操返し、世こそ怨めしと、獨では目も得閉ぢず、呼吸は引取る世の人は斯迄も形質を戀しと思ふものか、哀れと云ふも愚なり。

暫く世の人の思ふに順ひ、金殿玉樓、綾羅錦繡、山海珍肴が幸福で有るとして、扱文明起世と云ふ今の世に、人民の幾分許が此幸福を受獲つつ有るか、開化たお蔭に預る者は、其數幾程も無し、表面を飾る世の風俗、苦しき顔を見せぬども、其裏見れば誰彼も、食ふにも、著るにも、住ふにも、寛有る者寡くて、心安まる折も無し、斯る憂世と知りながら、世は文明

けく開化けたと迷の雲に覆れて、只形質のみ取らんとす、是恰も幼児が假に作れる紙張の家、藏衣服、牛馬、車を現弄ぶに異ならず、若し此を無くせんか、彼等に取ては、天地中の一大事と、鳴くは、嘘ぶは、悶るは、親兄弟の慰も聞入ればこそ、却々以て治りはせぬ。

大家高樓錦衣、玉飾は人の眼に何と寫るか、幼兒の張子の家藏、衣装と何が違ふか、是を持つから壽命が延るか、身體が健康になるか、病は無くなるか、若しそ云ふとが確に得らるゝならば、是等の所謂美しいと云ふ凡人の眼を驚かすものこそ、幸福を得る方便と云ふても宜い。然るに斯う云ふ家に住み、斯う云ふ衣を着る人に比べて、田舎の藁屋に住み、粗末い衣物着る農人の壯健にして、壽命長きもの多しとは、人の常に言ふ處で有る又美屋美衣を持つ人は、夜の目も心安からず、蓄へ置ける多くの財寶、如何なる者が奪ひ取も計られず、夜の間に火付やす

文明は幸福を與ふるか

らん寝ずに見張る者幾人をして間も不斷す家の外家の内鴉の目鷹の
目見守りて曲物居すやと警める外圍には天突く許の高土堤建廻し頂
には身の毛も彌立つ尖釘或は破硝子處塞く迄植立てる玩弄に等しき
財寶の爲に斯く迄人は苦しむ惱む所謂文明のお蔭に有附く人は夜の
目も閉ぢず安らげく睡られもせぬ禍患の中に戦々恐々と一生送くる
を懲すまに尙ほ形質ぞ幸福を與ふる物と思ふとは實に哀れなる文明
ならずや。

形質を幸福の物と思ふは今に始まつたことでは無い大昔から何の國
でも皆是に迷ふて来た文今も迷ふて居る人が色々の苦するも又罪犯
すに至るも其原因は形質に迷ふから起るので有る若し形質が常住も
變易ぬものならば幸も夫から出るで有らうけれども形質有るものは
遅かれ早かれ相を變る而已で無く相が無くなる天に在る日月星辰よ

り地の上にある山川草木一切生物人間も勿論皆日々變り行き終には
相も滅ぶ人の壽命が無窮く續くとしても周圍の物は滅なる其滅なる
物を永久も持傳へんと思ふてもそれは應はぬ況んや人は百年經ぬ間
に灰となるとは誰も知りながら其身の滅なるを忘れ形質ある物を
持續げんと希願ふ吾身滅びなば世に愛玩たる如何なる物も後の世へ
持行くとは出来ぬ皆此世に殘すので有るけれども其殘した物が又終
には無くなる然るに尙ほ其事が眞に心に入らぬ夫故死ぬる眞際迄形
質を離るゝとを哀と思ふ人は何處迄欲心が強いかな。

此欲心は何處でも有るとながら吾國では凡ての事をなるべく手輕
にして形質に貪著く心を制へた跡が一切事物に顯れて居たその事は
下に説く積ですが西の外國と交際り始めて後往時の善き風俗が亡滅せ
て何事にも形を増加し入らざる手數と寶とを消費し國土の中に在り

文明は幸福を與ふるか

又其に成る形質を破壊す事となつた。

人が物作るを産物製造と云て居るが實は自然出來た萬物を破壊して居る家を建てると言へば木や石を破壊してするので有る此破壊が大きくなるのを工業が進んだと云ふ又夫を助ける道を學問と云ふて居る即ち學問とは如何に能く自然の形質を破壊し得るかを研究めるので有るそこで形質の破壊し方が進むを學問が進んだと云ふ形質を破壊し自然ある寶を掘出し切出し終には山林は赤土となり土の中は空となる時が何時かは來るがそれでも形を取込むが幸福で有るとしそれを滅盡す術を學問學藝と云ふて矢張り人の幸福を増すものとして居る聞けば朝鮮では何處の山も猪山で有る冬の寒氣を凌ぐ爲め樹木悉く切取り燃いて暖室にしたからと云ふ亞米利加には大きな山林が多く有つた近頃は赤裸々に成た處が多くて樹木は取るに一本

も無く水が地中に流れぬと成たから田畑も作れぬと成つた大きな處が有ると聞いた日本も遠からず此運命にかゝるで有らう。

文明とは斯う云ふことになるので有る而して此文明た人々が昔より物を多く知て來たから出來た即ち知識を増し智慧が高くなつて學問が深くなつた知識と智慧の學問は文明の母で有ると云ふと成つた斯う云ふと成たとするに其所謂知識智慧學問と云ふとを少しく研究めて見ねばならぬ乞ふ次に之を説かん。

知識、智慧、學問は幸福を與ふるか

智慧は人の最も貴しとするもの、一で有る。智慧無くては何事も出來ぬ道を歩むにも智慧無くば如何なる禍難に遭ふか知れぬ夫故智慧を多く積まねばならぬとするには學問を博く修めねばならぬ世は益

知識智慧學問は幸福を與ふるか

益進む從て人の智慧も益々進むから益々勵んで智慧を獲得まねばならぬ智慧は一切幸福を得る力であるから何事は差置き先づ是を養ふとを最も勤めばならぬと云ふが今の人の唱ふる處である。

一應は尤と云ふて置く併しこゝに大に考へねばならぬと有る色色の方面から言ふべきと有る

智慧には善も有れば悪きも有る善悪にも色々有る人の爲になる善いと又吾爲になる善いと又人の爲にならぬ悪きと己の爲にならぬ悪きとも有る善き悪きを一口に云ふては大きな間違が起るそこで善い智慧悪い智慧で己れと他人との兩らの爲にか或は片方の爲に善いか悪いかを考へねばならぬそんな事は考へなくても誰にも判つたと有ると云ふて有らうが世に悪いとする人は皆此處を間違へるから生るので有る。

善い智慧と悪い智慧と二が全く類の違ふもので有れば始より誰も間違へるものは無い人は曰ふ彼の人は悪い智慧が有ると斯く云ふは智慧に本來善いものと悪いものと二有ると思ふから有る然るにそれは過で智慧の本性は善くも無く悪くも無いので有る全く一で二有るでは無い此ことは誰にも判る筈では有るが屢々誤る人に出遇ふから説明します。

脂の如く極て粘強くて物に觸るれば直ちに引著くものが有る誰も知れる「粘」と云ふもので有るそれを知て居るものはそれ丈の智慧であるそこには善心も悪心も無い能く何物にも取著もので有るからこれを應用して小鳥などを狙ひそれを押著けて捕へる此狙」と云ふとが一の智慧で外の或場合では善悪は無いたとへば的を狙ふて矢を射放つ時の如きは善悪は無いけれども鳥を狙ふ時には悪心が之を取らんと思

知識知能學問は幸福を與ふるか

ふから、此時の「狙」は悪い智慧となる又、竊で取れば小さき物ならば、取れると知るは善悪無き智慧で有るけれども鳥を取らんと、悪心が竊を應用するに至りて悪智慧となる又、他の場合には竊を用ゐて善智慧となる、たとへば鳥捕んとて山へ行く旅人有て、何か軽き小さな一物を取落し、一間許り深き谷間へ落ちた岩が突出で、其處に降りて拾ふと、出來ぬ、困て居る右の鳥捕らんと山に入る人が、それを見たとする、此人鳥捕る悪心は有るが、人の困るを捨行く程、悪い人で無いとして、旅人の爲め、吾持つ長き竿の尖に鳥竊著るを心づき、之を谷間に指入れ、落ちた品物を容易く取上げて、旅人に還し遣たとする場合には、此鳥捕は善い智慧の人と云はるゝけれども、それは善い智慧では無い、智慧は善悪は無いが、心が善いので有る子供への教の如く、餘り平易い話で有ると云ふ人も有るかは知らぬが、今の世、大きな智慧を幾年の間、苦しんで學んだ

人が、大きなものを狙ふて人知れず、獨で隠し取り、終には知られて、谷底へ放り込まれたものが、近頃は殊に多く有て、今に谷底から出られぬ憂愁に沈で居る者が夥しく有るでは無いか。

人の智慧とは、斯の如きもので有る、其智慧の中には、智識と云ふものが多く有る、これも子供への教では有るが、子供で無い人から、知識も智慧も同じもので有る如くに云ふを聞くこと、屢々で有るから、序にこれに付ても一言申し置ます、知識とは物事を知て居るとで、知て居るとは、先の鳥捕の例で言へば、鳥を知て居るとが一つ、鳥竊と云ふ物は粘り強いもの、知て居るとが一つ、それを何かに押付けば、取著くと云ふとを、知て居るとが一つ、遠くに有るものには、手が達かぬと知て居るとが一つ、竹は堅い長いもので有るを知て居るとが一つ、竊は竹に取著くと知て居るとが一つ、鳥は眼が有るを知て居るとが一つ、響を聞かしたら

知識知慧學問は幸福を與ふるか

逃るを知て居るとが一つ、夫から尙色々知て居るとが有る、それを知識と云ふ。そこで竿の尖に藕をつけ、鳥を狙ふて押付けば、鳥は捕られる。言ふは智慧で有る。是も極て淺い智慧で有るから知識と云ふても宜いが、それは長い年代に互り、人間が色々の事をして考へたもので有るか。ら智慧で有る。殊に谷間の物を、それで取ると心付たは智慧で有る。知識を數多寄合して何かを知り、又作すは智慧で有る。

去れば今科學とは智慧も固より舍では居るが、知識が主となつて居る。望遠鏡の無き時には天に色々人の知らなかつたものが有た。即ち知識が足らず有た望遠鏡が出来て始て、今迄知らざりしものを知るに至た。とが多く有る。即ち知識が増したけれども、智慧は知識程に増しては居ぬ。それから望遠鏡とても今より萬倍億倍億々倍遠く見ゆる力の鏡が出来たら、今知らぬとが知らるゝととなる。又今知たと云ふて居ると

が虚妄で有ると云ふとも知る時が来るで有ろう。

驗微鏡でも同じと、今より幾億倍微細い物を見る力が有らば、今科學で眞理で有るとして居るとが虚妄となる代が来るで有ろう。有機物の最微かいものを細包と云ふて居る。それが集つて蟲も魚も鳥も獸も人も、草も樹も出来て有ると。驗微鏡が教へて呉れたそれが知れたら、根本が知れたかと云ふに、それは矢張り判らぬ。今迄の學問で知れた處では、一切萬物の最も微細初は分子で有る。然るに分子には植物や生物の如く、生長機關が無い。云ふ分子が集つて有機物の最微い然かも生命有る。細包が如何して出来るかと云ふ問題は、未だ學問では分らぬ。

又人間の體內骨も肉も皮も皆細包から出来て居る。其中の細包が人間の玉子となり、女の腹に宿る。それが追々大きくなるに従ひ、又骨肉皮となる。一度骨肉皮となつた上は、骨肉皮と分明に見認らるゝが、玉子

知識知慧學問は幸福を興ふるか

のまゝではどの細包が骨になるか肉皮になるか
驗微鏡で見ても分明ぬ又骨肉皮になるにも人は人の形鳥は鳥の形に一一の細包が過失無く行きて夫々自己の住まる可き處に住る又細包が集つて男となり女となるは何處邊で然なるかなどのとは逆も科學では解らぬ驗微鏡とて何をも知らぬ。

驗微鏡や望遠鏡で知たとは知識と云ふので智慧では無い智慧を作る材料で有る知識とは學問のとそれが少しく筋道を立て、説くことが出来れば科學と云ふ嚴しい名に變るので有るが其知識即ち知て居ると云ふとが實は虚妄で有つたらば名變した科學も虚妄で有るとは言ふ迄も無い而して人間知ると云ふとは眼耳鼻舌身を媒介として知るので有るが其媒介が虚妄ばかりを吾等に告ることを能く心得て置かねばならぬ人は此五官を頼にするが極て頼む可らざるもので有ることを

下に詳しく説示すから、心を注いで讀んでもらひ度いそすれば人間と云ふ人間は如何に一切事物を誤り迷ふて居るか、心が始て覺めるで有らう。

斯く云へば人は云はん今の世に知識即ち學問が盛で有り、智慧が進んだから一切事が人の利益に成て居る。一數ふる迄も無い、物産製造は往時無かつた有様に進んだでは無いかと表面から見ると左見ゆるが根本から見てもらひ度い人が往時より何程幸福を増したか、そ云ふ事も後に色々申す積で有るが一言爰にも申します。
學問智慧が進だといふならば、醫學もその一で有る然るに今の人間は其お蔭で壽命がせめて百年迄は死なぬと成つたとか、病には斷罹らぬ方便が思附かれたとか、病は皆治療に定まつたとか云ふ幸福が得られたか否な人の壽命は確に短く成た今でも山奥にては百歳を起し

知識智慧學問は幸福を興ふるか

た老人が往々有るとは人の知る處で、云ふ人は今の學問など耳に聞
いたとの無い人で有る。今の學問の爲に斯く云ふ吾も、大患に取附かれ
大苦を爲たことが有り、其後全く自分で治療したは、嘗て著述した心霊の
現象の中でも書き、新聞雜誌でも記載たそこで、近頃は此事が追々廣く
唱へらるゝを見るが、世間の人々も、今迄の誤を認め來たので有る。此問
題は尙後に説き、三摩地によれば、醫藥無く病氣の癒るをも説きまし
よう。

學問が進んだと云ふとは、只多くのことを知たと云ふ丈で、それが人の
幸福を増す譯では無い。前に學問を鳥鱗に比べて申したが、今も又他の
物に比べて申します。學問は衣服の如き物です。衣服と云ふものは、寒け
れば身體を保護する爲め、何にても暖くなる物。身に纏へば善い。又暑け
れば衣服は全く入らぬけれども、今は世の習として、赤裸にもなれぬか

ら、薄きもの纏ひ、日の熱を遮けるすれば、此暑寒を避けると云ふことさへ
出来れば、幸福は其上には無い。然るに人は、それ丈で心に満足りさせず、
衣服を飾り入らざるものを身に纏ふて、反て幸福を打消す習慣と成て
居る。只他に矜る外、何等の幸福は無い。學問も其通り、多く學んでも入ら
ざるが多いで、只吾は此丈多く物を知て居ると云ふ矜の外は何に
もならぬ。衣服は時々流行に依て變り、去年持映されたものも、今年
多くの人は眼も當てぬ。それと同じく、學問も年々變り行き、十年廿年前
の世に持映された學說が、陳腐とて人は顧みぬところ成る。其流行に追
隨て、學說を革むる人は、勝しと讚るゝが、若し其學說が千萬年變らぬも
のならば、如何にも勝いが、又年を経るに従ひ、新しい學說が唱出されて、
前の勝い人は忘れらるゝかと思ふと、百年千年の古昔に唱へられたと
が、再び歡迎らるゝのも有る。全く衣服の流行に異ならぬ世の色々の事

知識智慧學問は幸福を與ふるか

が變るに連れて、學問も變つて行くつまり學問は當時々々の事に、幾何の益を爲すこと衣服の如くで、其當時々の事で有る若し今の學問が、奥底迄眞理を究めたもので有らば、何億歳を経ても棄てらるゝとは無い。斯く申して來れば、全く學問を修むる勿れと云ふ如く聞かるゝで有ろうが、吾は申します、そうとは言はぬと世の人が衣服著るならば自己も著るべし、赤裸では人が許さぬからけれども、學問と云ふ衣服を著たから、人が勝くなつたのでは無い、それが何程人の益となるかと云ふに、寒暑を防ぐ迄に、手軽に出来る衣服を著る如く、夫々の益はたしかに有る、それより上は、費で有て、益にはならぬ、即ち學問の華奢で有る。今少し異つた物にも譬へらる、世間の萬事は、時の走るに従て變り行く、其變り行く事に相應ふ爲に、學問も變る、云ふ學問を修めて置けば、忽ち間に合ふ、此場合の學識は、能く切れる刀の如く、所謂亂麻を斷つ如

し刀には、そ云ふ力が有る、即ち智慧となつて、働から無くてはならぬ。然るに往時には、町人と云はれた者が、刀を得た爲に、夫を用ゐて人を切り度なり、遂には罪なき人を殺したなどのとが有た、それを刀の祟と云ふた、刀が切れるを喜び、それを如何なる場合に、如何に用ゐるかを知らず、遂に悪心を起し、人を傷める、今の學問而已修めて、其を如何なる場合に如何に用ゐるかを知らしむる心を磨かぬ者は、恐ろしい大なる罪惡を犯す、學問知らぬ者の犯す罪は、大罪で有ても、直に露顯るゝ惡事で、時には人の見る處で、する、大道の眞中で、出齒庖丁、振上げ人を殺すが如き、如何にも恐ろしい心で有るが、それは多くは、一時の亂心で、害惡を受ける者も、數が少い、又、盜人の如き、夜の中に、人眠るを窺ひ、財寶を奪ふて去る、是も甚しき罪惡には、相違無いけれども、其術は、甚だ淺短で有るから、露顯とも、早い、其害の及ぶ處も、狭い、是等は、教育も、低く、又多くは、無教育のもの

知識知慧學問は幸福を與ふるか

智慧、學問教育の崇

教育を受け、然も高等教育を受けた一人の意味から云へば學者は、右の如き淺短な罪は犯さぬ。夫故教育學問が最も崇としと云ふか教育あるが故に彼は斯々の如き罪は、早く知られるを能く知て居るすれば教育學問のお蔭で彼は智慧高くなつたので有る。それ故教育學問を最も敬ふべしと云ふか教育學問とは、夫丈の價直より外は無いか果して然りとすれば、是れ教育學問の頼む可らざるを明に示して居るでは無いか。何故なれば、犯した罪が早く暴露るゝと極つて有らば、これを云ふとは、其裏には若し暴露るゝと斷めて無いと極つて有らば、これを犯すと云ふとが、明了に含んで居るでは無いか。去ればこそ教育あり學

問有る者は人に知られぬ道を、鑿横に研究べ、國法で表も裏も咎めることの出來ぬ秘密たる隱謀を施し、夜盜の得る能はざる莫大財貨を占領め知らぬ相して世は泰平と贅澤に身を飾り、酒色に溺る。彼等の惡事は容易は露顯れず、幾年の後漸く端緒が見出される程、念を凝した惡計で有る。今や吾國の上層に有る人の中、斯の如き阿修羅を多く出して、國家の威嚴は奈落の底に沈めり、而して後等阿修羅皆最も高き教育を受け、最も深く學問を修めたる者には、非るか。是前に言へる町人が、刀に祟つたと同じく、此等の人々は皆學問、知識、智慧に祟つたので有る。明治以前は、儒佛の兩道盛に吾國に行はれ、公卿、武家、商人、農、工、何れも此兩道の一つ、若くは兩つを重じ、神を崇むるとは、國民殘らず、眞心を以て之を爲せり。徳川家將軍として幕府を開き、天下の政憲一に其手に在て、專政の下に、人民、社々種々の壓制を受けたりと雖も、國全般より觀

智慧、學問教育の崇

れば幸福は今よりも多かりしと思はる。今は人皆自由の權を法律の文面に於ては保證はらるゝと雖も、事の實際を見れば最も力ある立法權は國民の一小分に限られ、夫が爲に大部分の人民は小部分の人民の擅横なる處置の爲め、彼等と平等き幸福を得る能はず。此事は形質の幸福を得る或一部に限らるゝ一の原因なるとは今更論する迄も無い。斯の如きとは專政制度の幕府の時代には反て今とは反對に幸福は成る可く廣く平等に與へらるゝ制度行はれたるは神儒佛道の反射なりしとを推測るに難からず。時には專横なる奉行與力など有て人民を苦しめたる例有りたれども、政を司る人々は、今の如く理論に偏よる法律に縛られず、仁慈を旨として下民を治めたるは、世間に知るゝ水戸の黃門公大岡奉行などの仁政に依ても知らるゝなり。語を變て言へば、仁慈の念は上下に通して重く崇められ、從て仁愛を説く儒教慈悲を教ふる

佛法、敬神を教えて人心の清淨を保持ち、此等を亂さぬとを人の最も守らねばならぬ。教とせり其頃の知識、智慧、學問は皆是等が根據で有て算數や藝術は末技と見られ居たり。

明治維新の時、廢佛論盛に起り、神佛の混合を禁め、神社境内の佛像を放棄て、市内處々に祭れる石地藏など皆市外に放遣る是が爲に國民が崇敬の念を破壊したると如何計ぞ而して全國に布かれたる學園は全く形質の學問にして、只知識と智恵を與ふる外、何等真心の修養となる教を與へず。當局者後に其非を知りて修身倫理と名くる科を置き、是に依て形質の學の不足を補はんと試み、今尙之にのみ頼りて眞徳道の布及を圖るとをせず。是にて事足れりとす。事果して足るか上にも言へる如く、近時官府に在ては高位高官の者、民間に於ては世界より最も信ありと視られたる形質産業大商人等、袖を連ねて今や累綫の辱を世に

曝しつゝ有り斯の如き現代の有様は形質文明形質學問質形幸福に魅

されたるに非ずと云は、將之を何とか云はんや。

形質は論理、數理、物理、其他一切科學と稱ふるもの、攝かる處で有る。

仁義忠孝は形質論議などの寸分も立入る可らざる神聖の靈域なり倫

理學は數理論議で建立たるものなり、斯の如きものをして、神聖の莊嚴

を侵し穢さしむる勿れ。

倫理學が數理論議で建立られたと云ふとを笑ふて、倫理と數理と何

の關係有るべきと云ふ者有るべし、此事が解らぬ者には、倫理學なる一

學は道義心を發揮しむるに足らぬ理も覺られぬ、少しく夫を説かん。

修身倫理の學を以て人をして崇高き仁慈の心を發揮さしむるを得

べしと思ふか、請ふ少しく考へよ、所謂修身の道、倫理の學は如何して教

へ、又如何して教へられつゝ有るか、仁義忠孝は斯々の如きもので有る

とて多くの例を示すと云ふか、仁義忠孝は人の守るべきもので有ると

云ふか、倫理を行なはねば世人には棄てられ己は遂に罪惡を犯すに

なる、と云ふか、斯の如き訓言は聞かずとも世の人の常に言ふ處で有る

から殊更學問で學ぶに及ばぬ要めて言へば善事をして惡事をするな

と云ふとで、そ云ふ事は幼少より親なり、兄弟なり、他人なりから日々聞

く處で有て、學者から始めて聞くのでは無い、幼兒と雖も、其様な言葉は

耳が蝸になる迄聞いて居る、知て居る、然るにも係らず惡事を爲る者が

多く有るでは無いか。

孝行の如きは生れてより仁義忠孝の訓を聞きし事無き幼兒もする

者が有る人間丈では無い、人より外の生物でも、孝をする者が多く有る。

後に色々其例を示めします、それらは本性で有ると云ふで有ろう、固よ

り其通で有るが、本性無しと思はるゝ人でも、迷の爲に本性を忘るゝも

智慧・學問教育の崇

のが多し此善本性は人にも凡ての生物にも有るけれど欲の迷から本性を忘れる其事も後に委しく申します此迷有る間は何程忠孝を説いても受附けぬ例を取て言へば爰に一人有り甚た孝ならぬ是に向つて孝をせよと言ふ若し其者が孝は何の爲にするやと問はば倫理學は何とするか親の恩を説くかそれでは賣買で有る恩を受けたから夫に報酬をするかとせば一圓の品物を買ふたから一圓の代價を拂ふと云ふ形質を數理で有るそこには道義も倫理も孝も有りはせぬ此賣買數理の教では不孝者は云ふなるべし吾親は吾を育てず人手に渡した親からは何も恩を受けたと無き而已ならず親は放逸で牢獄にも入れられた又吾を見れば常に吾を撃た此通り吾に傷痕が有る夫故孝をする義務は無いと倫理を説くに權理義務などの言葉を使ふ世となつた是又全く數理で有つて商業と異りは無い是れで有るから友人との間にも交易る

と無くば信を盡くさず況や知らぬ他の人には聊かの仁慈を表すと無くして世は渡れる場合が宜ければ他を斃しても宜いと云ふ今の有様で有る。

此他を斃しても宜いと云ふ心を今の教育で尙一方法を以て契勵して居る試験がそれで有る一級若くは全校の學生誰か他の學生より點數少きを以て快よしとせんや級の中は固より一校の中でも第一の點數を占ざる可らずと競争ふことは言ふ迄も無い此競争はたとひ他を憎み又輕する心は無くとも自己が他より勝れたらば内心若くは外面にも慢るので有る畢竟は他を斃して喜ぶ心を養ふとは確で有る學業の競争丈では無い他を斃す心は小船の競争球の競争に於ても同じとで有る愈よ世間へ出でゝは何人よりも高き位につかん高き名を得ん、多き威權を得ん多き財寶を得んとの競争心は益々激しくなる此時に

智慧、學問教育の樂

は倫理の念など心に浮ぶ筈は無い、是皆形質に捕はれ、心暗昧となりて
 欲念盛に起り、人を憐む心などの出る理は有らず、是亦今の教育に依
 て多くの高等罪人を出したる原因の一ならずとせんや。
 今は科學が最も能なるもので、何事も是に依らねば出来ぬと世の人
 は思ふて居る、文學科學は最も高き眞理を教ふるもので、之に相當ぬとは
 皆虚妄で有るとして居る、此考の爲に世は種々の大な誤と禍とに陥つ
 て居るとに心の著く人が寡いのは慨はしいとて有る、世の人の迷と云
 ふ迷は此誤つた考に基くと云ふとを知らねば、世を革めるとは逆も出
 來ぬ、斯く言へば人は笑ふて予を狂人と云ふて有らう、因て次に少しく
 説くから、心を静めて詳に考へてもらひ度い。
 抑も科學とは何ものぞ、科學とは知識を前提として論理で建立した
 論斷で有る而して二の前提から、第三段の論斷に至る間の論の歩に誤

無くば、その論斷は誤無きとは固より有る、然るに若し其前提が誤り
 で有ば、たとひ三段の歩に誤無くとも論斷は誤論となるは言ふ迄も無
 い、斯なとを爰に云ふは人を愚と見てのたと予を叱る人も有りましよ
 う、しかし此書物は斯云ふとを心得ぬ人にも讀んでもらふ積で書くの
 ですから、子供に言ふ如きとは追々書くことに致します、抑元へ返りて申
 します、然らば人の知識なる前提は確に誤無きかと云ふ問題が起らね
 ばならぬ、それに答て申します、人の知識又殊に學者の知識に誤は無し
 と皆思ふて居るが、知識と云ふても事物の本性を眞に知る能力は無
 表面に暫く顯れる幻を知るに止り、其根本の本性を知る力は無い、其上
 今眼の前に現はれて居るものも、實は本性が有るのでは無い、因と縁と
 が和合て現れたが、縁は常に變るから、今有つたと見えた相は滅て本性
 など有りはせぬ、宇宙の一切萬物皆それで有るから、形質の本性は捕へ

るその出来ぬもので有るそれ故知識が誤らなくとも本性は思識らぬのが當然で有る然らば表面に暫く顯れた幻影丈は誤無く知識が知るかと云ふにそれも出来ぬ其故は知識とは眼耳鼻舌身に觸れてそれを通し吾等の身の外に有る一切萬物を内に知らせるので有る然るに此五官は實に粗末しい作方で吾等が眼で見耳で聞き鼻で嗅ぎ口で味ひ身に觸れる物悉く虚妄で有るのです眞は一つも有りませぬ一言丈で吾言ふとが解りますまいからその事は下に至て詳に申す事に致しませぬ斷て虚言も戯言も申しませぬ下に於て言ふとを心を著て讀まれるならば今こゝに云ふとを如何にも道理に稱ふて居ると悟られますそこで斯く人間の五官から得た知識が誤つたもので有るにそれを前提として論斷して出来た科學が全部誤て居るとは明かである今其理由を次に述べますが其前に前提を誤れば論斷が誤となる一の例を引

きます。

「おーすとらりやへ歐羅巴の人が始めて移住んだ時牛幾疋かに荷を負せて旅をした土地の蠻人それを見て彼牛等は此人等の妻で有ると云ふたその論理は此蠻人等は移轉する時家具を運ぶは彼等の妻の役で有る今は牛が外國人の荷を運ぶ故に牛等は外人の妻で有ると論斷たと云ふとで有る科學の論斷此に類たるものが多く有る故に科學は誤を見出さるゝ度に變り行くので有る。

天地の中に在る一切形質有る物は其を作る原の種が有るそれが今に化學では七十三と數へられて外にも尙一二有るが原素で有るか否か極らずに有る此原素が最も初めの物で有るからそれより奥には種は無いは是さへ有れば形有るものは何でも出来るとして有るそこで一の疑が有る炭素は原素で有るが木炭も石墨も鉛筆の中に通して

智慧、學問教育の崇

有る墨の如き鉛の如きもの、又金剛石の如き此等は皆炭素ばかりで出来て居る同じ元素が如何して甚しく異つた三の物を作別るか二つの異つた元素が和合ふて元の二とは全く異つた一の物となるとは能く解るが一つの同じ物が和合ふたらば、矢張元の物と同じ物になる筈である。然るに炭素が和合ふて金剛石となり、又石墨となり、又木炭となる。一つは堅きと萬物中で之に勝る物は無く、清らかに透明り、燦爛な光を放つ石となり、一は觸れば手を黒くし、燃せば火となり、炭となる。今一つは鉛色の脆き金屬の如くなる。云ふとは何故で有るか。化學では金、銀、鐵、鉛等は元素で有つて外の物から出来たものでは無いとする。此等皆異つて有て、金はどこ迄も金、銀はどこ迄も銀、鐵、鉛も其通で有るとし、金剛石、木炭、石墨は炭素から出来たと云ふは何處かに研究の足ぬら處が有るのでは無い。か炭素から此三つ異つた物が出来るとすれば、

他の元素と云るゝものも皆何か一物より出来ては居ぬかと云ふ疑が化學を學んだ時に吾心に起つた。然るに此質問に對ひ夫は allotropi に依て、そうなる」と答へられた。其意義とは如何。曰く「同じ質の物が異つた性になる」と云ふして見れば、これは答にならぬ。只事實の起る事を其儘に言葉にした丈で質問の説明にはならぬ。

近來「X線」が発見され、又「ラヂウム」が発見されて、今迄の物理、化學で説けることを大に變ねばならぬと起つた。元素に付ての考も變つた。思寄らぬ物が発見されたとは色々有る。元素の數も予等が化學學ぶ頃は六十餘で有つたが、今は七十餘と成つた。今より後には一つとなり、進んでは零から諸の元素が出来ると云ふ説が唱へらるゝで有ろう。

斯の如く科學は變るもので有る。科學が變る而已では無い。吾等が自然の理と思ふて居ることが變るので有る。譬へば青、黃、赤は根本の色で、天

地^ち到^{たう}る處^{ところ}此^{この}色^{いろ}有^ありと思^{おも}ふて居^ゐるけれども、そは此^{この}世界^{せかい}丈^{だけ}の理^{ことわり}で、それも今^{いま}丈^{だけ}で有^ある何^{なに}故^{ゆゑ}かと云^いふに、今^{いま}見^みる色^{いろ}は吾^{わが}太陽^{たいやう}の光^{ひかり}が彼^あの現^{いま}状^{じやう}で有^あり、又^{また}地球^{ちきう}と太陽^{たいやう}との間^{あひだ}も現^{いま}状^{じやう}が續^{つづ}き、又^{また}地球^{ちきう}の表^{うへ}面^{めん}も現^{いま}状^{じやう}で續^{つづ}く間^{あひだ}は、色^{いろ}も現^{いま}状^{じやう}で續^{つづ}くけれども、太陽^{たいやう}若^{もし}くは太陽^{たいやう}の近^{ちかく}傍^{わき}、若^{もし}くは太陽^{たいやう}と地球^{ちきう}の間^{あひだ}空^{あひだ}氣^きの状^{じやう}態^{たい}、地球^{ちきう}の上^{うへ}の状^{じやう}態^{たい}に、大^{おほ}きな變^{かは}化^りが來^きたらば、色^{いろ}は全^{まった}く變^{かは}る。とは今^{いま}より明^{あきら}か有^ある太陽^{たいやう}より外^{ほか}の光^{ひかり}で色^{いろ}を見^みれば、色^{いろ}が變^{かは}つて見^みえらる。皆^{みな}人^{ひと}の知^しる處^{ところ}で、夜^{よる}には電^{でん}燈^{とう}や其^{その}外^{ほか}の光^{ひかり}にて見^みれば、黄^{きいろ}色^{いろ}は白^{しろ}と見^みらる。若^{もし}し今^{いま}太陽^{たいやう}の組^{くみ}成^なの中^{うち}に變^{かは}化^りを起^{おこ}し、其^{その}光^{ひかり}を變^かへたらば、地^ちの上^{うへ}一切^{いっせつ}物^{ぶつ}の色^{いろ}が變^{かは}るに至^{いた}るとは、明^{あきら}かなと有^ある。

物^{ぶつ}には重^{おも}量^{りやう}が有^あるとは、自^{おの}然^{づから}の理^{ことわり}にして、夫^{それ}が變^{かは}るとは、世^よの多^{おほ}くの人^{ひと}人^{ひと}は思^{おも}ふて居^ゐぬけれども、高^{たか}い山^{やま}に登^{のぼ}れば、重^{おも}量^{りやう}が變^{かは}る。地球^{ちきう}の赤^{せき}道^{だう}の直^し下^{した}に行^いけば、兩^{りやう}極^{きよく}に一千^{せん}「ぼんご」の物^{ぶつ}が九^く百^{ひゃく}九^{じゅう}五^ご「ぼんご」程^{ほど}に減^へる。地^ち

中^{ちゆう}心^{しん}へ行^いけば、重^{おも}量^{りやう}が全^{まった}く無^なくなる。斯^{かく}の如^{ごと}きは、物^{ぶつ}理^り學^{がく}でも言^いふて居^ゐる。然^{しか}し、それ今^{いま}丈^{だけ}のと有^あて、如^{いか}何^{なに}なる大^{おほ}變^{きは}化^りが、地^ち球^{きう}の上^{うへ}に起^{おこ}つて、地^ち球^{きう}が太陽^{たいやう}に近^{ちかく}くとか、太陽^{たいやう}より今^{いま}よりも遠^{とほ}く離^{はな}れるとか、或^{ある}は他^{ほか}の星^{ほし}が此^{こゝ}邊^へに來^きるとか、火^ひを吹^ふき出^だして、地^ち中^{ちゆうちゆう}の火^ひの氣^けを吹^ふき去^さるとか、すれば、重^{おも}量^{りやう}の變^{かは}化^りも起^{おこ}つて來^きる。して見^みれば、自^{おの}然^{づから}の理^{ことわり}と思^{おも}ふ、現^{いま}今^{いま}の事^{こと}柄^{がら}が、無^な限^{げん}年^{ねん}代^{だい}繼^つ續^づくと思^{おも}ふは、間^ま違^{ちが}ひで、只^{ただ}一^{いつ}時^じの事^{こと}で有^あると知^しらぬば、ならぬ人^{ひと}間^{かん}で見^みれば、萬^{まん}年^{ねん}億^{いっ}年^{ねん}は、長^{なが}久^くと思^{おも}はるゝが、宇^あ宙^{ちゆう}無^な限^{げん}年^{ねん}代^{だい}は、逆^{さか}も人^{ひと}間^{かん}の思^{おも}量^{りやう}處^{ところ}では、無^ない。然^{しか}も變^{かは}化^りは、一^{いつ}度^どに來^きるので、無^なく、常^{つね}に間^ま斷^た無^なく續^{つづ}いて、變^{かは}化^りつゝ有^あるが、人^{ひと}間^{かん}には、夫^{それ}が心^{こゝろ}附^つぬ、從^{したが}つて、科^か學^{がく}で極^{きよく}て置^おいたとが、自^{おの}然^{づから}では、何^{なに}時^じの間^まにか變^{かは}つて居^ゐる。

自^{おの}然^{づから}は、變^{かは}らぬものと假^{かり}に定^{さだ}めても、又^{また}科^か學^{がく}も變^{かは}らず、誤^{あや}まりも無^ないと假^{かり}に定^{さだ}めても、科^か學^{がく}知^し識^しが上^{かみ}に陳^のべた如^{ごと}く、真^ま實^{じつ}を見^みて居^ゐぬので、有^あるから、之^{これ}

を無上き確な頼に成るものと思ふは大きな誤で、人世が迷の中に閉られて眞の文明の光を見ることがいつ迄も出来ぬ人の知識が虚妄で有るとが明かに悟覺れたならば、今言ふたことが解ります。夫を知るには、上に云ふた通り、知識を得るに用ゐる眼、耳、鼻、舌身の検査をせねばならぬ。依て次に其検査を致たします。

人は五官を頼とす

人には眼、耳、鼻、舌、身が外に在りて、意が内に在る。此等五又六の物が有るから、吾身の外の事、内の事が解る。若此等無くば、何事も知らず、何事も出来ぬ。夫故人は此六の物を最も大切の物と思ひ、朝ても暮ても此等を頼として、何事を爲るにも先づ此等と相談ひ、此等が善と云へば行ひ、悪と云へば行はぬ。欲しと云へば獲る、嫌と云へば排ける。生れてより死ぬ

る迄、日々夜々斯く眼、耳、鼻、舌、身の命ける儘にするが、人の眞の通で有りて、眞は此六が教ふるなりと思ふは、人大方の考である。此六が果して毎時眞を吾等に教ふるか否かと云ふと、深く究めるとは、人として何事はさて置き、先づ爲ねばならぬとでは有るが、世の多くの人は、聊も夫に氣付とを致しません。左云ふ人々に一つ二つ御尋が爲度い、聞いて下され。

人は眼に騙さる

先づ眼から申しましよう。人々は眼の見る處は皆眞實で有る、若し眼を疑へば、吾等は物を見る事は出来ず、一足も歩むことが出来ぬ。眼は眞を見ればこそ、吾等は生きて居ることが出来ると云ふでしよう。此答は、大要の處尤もで有ります。然るに物を見過るが爲め、色々の失敗を爲るとは誰

人は眼に騙さる

にも度々有るでは無いか折に觸れて起こる其等の見過は暫く取除る
として人々は大方の場合に於て眼は虚妄を見せぬ必ず眞を見るもの
と思ふて居ますけれども夫が大誤で有るのです。

試に尋ねます雪霽れて天氣麗かな時天空を見れば何が見ゆるか
や鳥の飛行くあらばそは固より眼に見ゆるその外は青雲の蒼空一面
に塵一つだに見ゆるとは無いさて夜と成ては如何と云ふに空天満目
星晨燦爛として紫金砂を散布したる如きを見る晝には無き此星晨は
夜に入て何處より出顯でたるか亞米利加之土人が星に就て面白い考
を爲て居たと云ふとであるそは如何にと云ふに大空に一人の老嫗有
り満月を破碎きて星として天空に散布すと云ふのです之を聞けば世
の人々は其小兒らしい考を笑ふで有らうがさて星は夜如何して顯る
るかと問詰らるれば直ちに其理由を説明すとを得る者は甚だ寡かる

べし少し物理を學びたる人は固より其理由位は知りて居るから右の
問に答へて晝間でも星は有る併し太陽の光が強いから星は夫が爲め
光を失ふ故に晝間は星が見えぬので有ると云ふ成程其通りと誰も其
上に考を爲るものは無いそれが正當で有るとして吾等の眼は甚だ頼
みがい無きものとは氣付かぬ如何に日光が強くて星の明かに見ゆ
る眼で有らば其眼は吾等に虚妄つかぬものと言ふても善い日光に遮
られて星が見えぬとは眼がそれに打勝つ力無しと言ふとで畢竟吾等
は眼に虚妄を教へられて居ると氣付く人は殆ど無い。

人は眼に騙さる

考深き人は右の例を聞けば眼は見ると毎に虚妄を見て居ると悟
解るで有らう併し一つ二つの誤の例を聞かされても夫は取除の場合
で有る矢張り多くの場合に於て眼は眞を見知らずと思ふ人が世に
多く有ると思ひますから悟覺早き人には懶くも有らうが暫く忍んで

今少しの間眼の頼無き例を陳列て、覺悟遅き人の爲め説明かすを許
るし玉へ。

既に星の事を申ししたが、星の中にも此世界より遙に大きいのが有る
とは天文学では判然と有る又太陽は地球よりも其直径百倍の以上有
るとは天文学で教ふるが然らば天文を知る學者の眼に日輪が此地球
より百倍大きく見ゆるかと言へば彼等の眼にも吾等と同じく五六寸
ほどの皿より大きく見えぬそれは其筈距離が遠ければ遠きほど何
物も小さく見ゆるが天地の道理で有ると言切て、人の眼の力無きとを
思當る人は殆ど無い如何に遠く距離ても物の大きさが眼前に見ると同
じく有つたならば、吾等の眼は眞を見せると言ふべきでは無いか眼前
で十尺と見ゆる物が一里十里百里千里萬億里の遠き距離に在ても矢
張十尺と見えたらば、眼は眞を見ると言はるゝが遠ざかる程小さく見

ゆるは眼が虚妄を見せるのでは無いか是れは言へば眼の頼むに足らぬ
とは既に判然と判る筈では有るが人に依ては夫でも未だ全然了解ら
ぬものが有るそこで嘔吐は有るが更に一つの例を取て申さう吾等の
眼には滑かにして美しと見ゆる物でも實は滑では無い美人の色艶も
顕微鏡を以て見れば、あな恐ろしの巖山の如く、それにX光線の透徹り
見る力を加ふれば、肉眼には美しくと見る皮膚の内には、大きい神経小
い神経動脈も静脈も、太い骨細い骨の幹となり、枝となる様も透とほ
り見て血海には潮流漲り、赤潮黒潮摩れ、濁流潮の中には萬種不淨
が漂ふ、其不潔き様は眼も當られぬほどである此等の眞態は凡眼に
見えぬから、人は美しと欺かれ、果は其身を誤まるに至るので有る人の
体内だけでは無い一切物の外面は見ゆるが其内部は見えぬ、極めて薄
き紙片すら表面のみは見えて、其内部と裏とは見えぬ、況して容積厚き

人は眼に騙さる

に申した如く吾等の眼の構造が顕微鏡の如く有らば美術品見たとて何の趣味も有りませぬ斯の如き眞眼を備へた人は夫故美術に愛着を致しませぬ此美と見ゆる物に愛着ると云ふとが人の煩惱を生こすので有るから美不美に頓著はぬは正覺れる人の崇高き理の一つになります併し世の人は大概美に愛着るからとて之を禁止るとは容易は無い夫故に正覺者は暫く吾も人と共に美を樂む眞似をしてそれにより人を迷より救出す方便と致しますそこで一つ考へてもらひ度いと有る正覺者が美を方便にするからとて凡人が愛着る一切の美を方便に採用るのでは無い此點を誤りて何でもかでも世間凡愚のするを撰擇無く許るして自己も其中に歡樂を貪る似非覺者が往々世に在るは苦々しいとす吾國往古には眞正の覺者少からざりしと見え吾國の美術は皆淡泊として所謂愛著沈溺る様が無い無用手數を略

き事物の粹而已を抜取るが日本美術の精神です美術は人間の心で見美しと思ふ處を寫出すので有る又上にも嘸々説けるが如く眼は虚妄を見て居るので有るから虚妄は虚妄として寫置けばそれで事は足る然るに此眼は眞を見るものと思ひ眼に對ふ一切事物を微細に寫すは恰も小兒が玩具に愛著くと同じことです今これに依り日本の美術と西洋の美術との差を申せば西洋の術は何事でも手數を入れねば已ぬ西洋は愛著の精神が甚く強いと此點で明に解る。譬へば衣服の如き吾國の衣は首筋より足迄一枚の布か絹で之を身に適すにも極て裁切るとをせず絲は一筋にて上より下に眞直線に下り之を解ほごきても殆んど新布絹の如く大人の衣を小兒の衣に變る如きは常に吾等の爲す處で有て而かも之を着て決めて見苦からず之を著るにも右より左より折合せ帯一つで著仕舞ふのである極て優美

人は眼に騙さる

本に斯の如き畫が古くより開けたのは、日本の人は眼には餘り執着かず、精神に重きを措きたる證で有る之は往古より眼耳鼻舌身の五官は頼み難いもので、兎角虚妄を人に教へ、人を過らしむるもので有ると教ふる道が吾國に廣く奉がれたからで有る眼のみ頼る人は世に廣く知られたる光琳の千鳥は眞の千鳥とは全然違ふ、あれは妄畫で有ると云ふ實に斯く評した人が有る然るに近頃西洋でも日本畫が少し解りかけたと見え、以前の濃密畫より離れて成る可く筆畫少く使ふて畫き出したがそれが又横道に入りて放埒の亂畫となつた之れ矢張眼のみ頼りとして眞心を忘れたので有る然るに吾國の畫家の中又これを倣ふて此頃は何とも評兼ねるなさけない畫が彼此の雜誌に夥しく出て有るを見受ける可笑いでは無いか元來日本の畫を眼許で見た西洋畫家が日本風を氣取て爲した術で有らふこれを西洋風で有ると思ひ、日本

畫家が眞似て西洋風と氣取て居る何と興醒いとでは無いか是等皆な眼のみ頼りして起こる狂態で有ります。

畫の序に今一つ申します眼は眞を見るもので有るとの考から人はとかく眼を離れて何事をも爲し能はぬとして居る上にも言ふ通り此考は世の所謂文明と言ふものが進むに従つて益々強くなるそこで寫生風の畫には是非本物を眼前に据えずには出來ぬととなる於是眞心は全く働かぬととなるそれ故美人の畫を畫くには女を赤裸にして眼前に据えねばならぬとして居る眼のみで表相計を見て夫を美しと見る人は上に度々申す如く全く眼に騙されて居るので有る眞心清淨にしてこそ眞の美人と見るべきに、赤裸となりて女の最も恥る處をも誰憚らず一時間晒して幾金と價を目的に女の美德を忘失る者に何の美しい點が有るものぞ裸體美人の畫を見て婦徳を思ひ起さしむるもの有る

人は眼に騙さる

か先づ其容貌は見取た女の真相か、畫家の筆にて美化したかは知らぬ
 ども、人をして其前に敬愛する心を起さしむる者有るか、之を寫せる人
 が寫しつゝある間に如何なる感想を持つて有らうか、貧きが爲め普通
 の女の爲し能はざるを敢てするは痛しいこと、有るとは思はぬか、
 若し斯く思ふとせば畫家の筆も濫り、寫す顔も鬱どうしくなりはせぬ
 か、此女は金錢の爲め恥を忘れて斯く大膽きとをする、嗚呼、人には賤し
 い根性を持つ者も有ると、畫人が畫きつゝ思はぬで有らうか、若し左
 れば其顔は卑陋い相となるで有らう、畫家にして上に言ふ如き感想が
 心に生るとすれば、とても品性崇高き美人の相は出来ぬ筈、有る何の
 感想も生らぬと云ふならば、其畫は兎も角、品性墮落たる墮婦の真相を
 畫きたるものとなる、抑も眼の見る處は虚妄で有ると知らば、如斯墮婦
 をたとひ赤裸にせずとも、暫くも眼を之に注げて美を作出さんなどの

考は起るべき筈は無い。

畫の事を長く言ふたが、彫刻其外土などにて捏ねたる美術品の中に
 も畫に就てと同じ評を爲すことが出来るが、今は略いて言はぬとに致し
 ます。

眼は斯の如く頼がい無き機關で有るが、世の人は皆之を頼として、吾
 眼で見たからは過誤は少しも無いと極て居る、然るに此眼が有る爲め
 諸の苦が起るを人は知らぬ、苦は内心より生るものと人々は思ふ
 けれど、吾等に眼耳鼻舌身が無くば、苦は少しも無い、文人は此眼有るが
 故色々の樂も得られると思ふて居るけれども、それは眞の樂では無く、上
 にも言ふた如く、凡ての物を見過て樂で有ると思ふて居る、恰も夢の中
 に樂しと思ふとを見ると同じく、目覺て後始て其虚妄を知るのです。
 世の中の事物は皆な夢に見ると同じく、美しと見るも迷穢と見るも

人は眼に騙さる

迷で有ると知らば、世間の苦樂は皆眞の苦樂では無いとが覺られる。吾見る處が眞で有ると思誤るから、これではならぬ、斯く有らねばならぬと千々に心を碎きて一時も心の安まるゝ無く、日々苦惱の中に不快年を過し、命の終る迄、心平かなる生涯をする事が出来ぬ、恐しいは迷で、終には吾身を誤り、人を害ね、驚歎い罪をも犯すことゝなる、今は眼の話の處で有るが、そこで迷の事を言へば、迷は眼のみより生ると云ふが如くに聞く人も有らんか、それは違ひます、眼の外、機關も眼に等しく人を欺く悪魔で有ります、即ち耳鼻舌身が皆魔で有るので、依て次に耳に就ても人が迷に陥るゝを申しませう。

人は耳に騙される

耳も人々の頼とする處で、之無くば何事をも聞くゝを得ず、道路歩く

にも車の走る響馬の駈る音を知らずば、如何なる危険き事に遭遇ふやも計られぬ、人の言ふ言語一つも聞えざれば、如何に便無く有るべき、琴笛絃の音耳に入らずば、人は如何に佗しかるらん、耳有りてこそ生詮も有れ、耳は眞の道を人に傳ふる最貴き媒介なり、人として世に生息らへる限り、頼とすべき物の一つは耳なり、とは人々の思ふ處です、如何にも一應は其如くで有るが、これも能々研究べて見ると、案外頼み寡き機關で有ります。

先づ人々の耳の力は皆一齊に定て居るかと言ふに、人々の眼の力が各々相異ると同じく、音聞く力は人に依りて大に違ふ而已ならず、同じ人も年齢の進むに従ひ、聴力も衰へ、又身體の都合、空氣の濃き薄き、其外色々の事より、聴力に差別が起る、眼の處では斯ふ云ふとは言はずに、措いたが、眼も耳も其外の三官皆其通りと承知してもらひ度い、

人は耳に騙される

聴力は斯く定まらぬ上に、人間の聴力には限が有て、遠き處のとは何事も聴こえぬ日本に居ては米國や歐洲に走る汽車電車の音は固より、遠き外國に大戦争ありて、其處にては大砲の音天地に轟き渡るとも此國の人は誰もそれを聞知る者は無いそれが通例ことで有るから人は耳の不便を不足とも思はず、耳の聴力甚だ弱しとも思はず耳が聴く處は真で有る此耳に響く時は音が有る然らざれば音無き閑静き四方と思ふて居る遠き國の砲聲はさて置き吾傍に這ひ行く螻蛄の歩む足音すらも耳に感へる人は無い何と耳と云ふ機關は頼無いものでは無いかけれども人は耳を無此上頼の一つとして居るこれ迷の又一つで有る。

氣の動搖草木の葉音昆蟲の運動吾呼吸吾身中の血脈に往還する潮流の響轟々として八百萬の雷神一時に天地に轟渡り鳴響く如く耳を撃き破るに至るべし然るに吾等の耳は此等を受けける力は無い。

音樂は面白きものに極て居ると人は思ふ然るに外國の人は概て日本の歌の音を哀しとて聞くを喜ばぬ哀しく聞こゆるが真か日本の人は哀しと知りながら其哀しきが樂みとなるか斯く疑を容れねばならぬ程耳の感が國に依て異つて居る又日本人でも各々好む音が違ふ。琴の音を嗜む人有り、三絃の音を喜ぶ者あり、笛を愛る人、太鼓を好く人、義太夫を好み、新内を喜び、謠曲の音調を愛で、浪華節を賞めるなど人様の耳感が有て、一口に音の遊は面白いとは言へぬ性來何の音樂の音をも喜ばぬ者もある。

斯く言ふと、それは人の心に音樂を好むと然らぬとが有るので、耳の過人は耳に騙さる。

では無いと争ふ人も有るべし如何にも心の持方で物の好嫌が起るけれど耳の中の構造の各々異なるが爲め或音は甲人には心持よく響き乙人には心持悪敷響くとは確で有て夫が爲め心にも好嫌の別が生る又習慣に依て耳の受方が變る國々の音楽調子が異なるは夫が爲で有る。

人は鼻に騙される

次は鼻に就て言はん此鼻の力も極めて弱きもので遠くの香を嗅ぐとは出来ぬのみならず同じ香が暫く續けば善き香でも悪しき香でも感なく成るとは誰も知て居る又吾等が善き香と思ふものも眞は善くも悪くも無い麝香は世に最も美しい香の一と云はるゝが生る麝香獸が他の獸の近方を通行する時は獸等は皆其香を厭ひて逃去ると聞いて居る。

るこれは虚誤では有るまい。

尾籠なことながら人々が日々下に排出すものは天地の中最も悪臭きものと定て有ると思はれそれは天地の定まれる理法で有ると考へられて居ます然るに犬や豚は之を好佳物とし舌鼓うちて食べる豚犬の鼻が間違ふて居ると言ふか犬の鼻は人の鼻より物を善く嗅ぎ分けるとは皆人の許す處ですすれば犬の鼻は人の鼻より勝れて居て人の鼻が悪臭と嗅ぐは誤で有ると言はねばならぬでは有りませんか然り人の鼻は誤て居るとは確實で有る然し犬も豚も誤て居るので左言ふ所以は一切物の香の善悪あるには非ずそれを善悪と分別するは人の誤つた意から起るので其事は後に詳細説くとして今尙は一つ二つ鼻の嗅ぎ方が人により國により異なるを申しませしう
西洋の人の好む香の吾國人に好かれぬもの又それと倒になるもの

人は鼻に騙される

が有る、それも親しみ慣るれば變ります。たとへば、ちすの如きは、今に多くの日本人には、其香を好かれませぬ。吾國の澤庵漬の香は、大方の西の人には嫌はれます。私の米國の某友人が、日本に來りて一日二日の中に、大阪の西洋人の建てた病院に入院しました。見舞に行いて、色々尋ねた處が、全く澤庵漬の香を何處かで嗅ぎ、それより其香が鼻につき、日本に到る處、此悪き臭で満ちて居る、それが爲め熱病に罹れたと、そのとで、數日かの後病治ると直ちに本國へ歸り行きました。吾等には、日に三度の飯に澤庵漬の缺けざらんを欲するに、去迎は融通のきかぬ鼻なるかなと呆れました。

今は亡き母の一つ話に聞いたとは、東京京都の間、近江近くの汽車驛で、近江の名高い鮎酢飯を買ふた夫婦が、有た車が走り出して、後兩人は晝餐をせんとて、先に買ふた鮎酢飯をやをら取出し、竹皮を剥去り始め

たが、兩人とも奇き顔付をして、皮剥きつゝ、二度三度鼻に近寄せ「はい、これは、ふんはい、これは、ふーん、腐敗して居るらしい、ふーん」と言ひつゝ、少し剥き去れる皮より飯を覗き出させ、篤に嗅ぎ込んで、後兩人とも大聲張り上げ、「おー、酢飯屋め、こんな腐敗たものを賣付けた、太い奴だ、棄てる、棄てる」と言ひて、二つの酢飯を車の窓より放り出して、後も連りに不平を言ふて居たので、成程鮎酢飯は慣れぬ人には、鼻もちの出來ぬほどに悪臭と嗅がるゝが、これを嗜む人には、其香は言ふに言はれぬ甘味香と感へるのです。如斯事は、世の中に幾多でも有るのですが、只鼻を正直に思ふて居る人には、其事に心が付きませぬ。

人は舌に騙さる

次には舌に付て少し申しましよう。味の善悪も香と等しく、人々によ

人は舌に騙さる

りて大きな差別が有る。又同じ人でも時を違へて變ります。是も心の持
 方でも變るが、それは後に云ふ事として、舌の組織と其時の場合とに因
 り人人で異つて居るから従て味も違ふのです。人は味の善悪など天地
 に定て有ると思ふて居ますが、これも眞には何の極も無いのです。
 味と一口に言ふが、二つの側が有る。一つは美味不味の差別、今一つは
 甘、辛、酢、苦の差別が有る。又此二つの側に何れも中性味が有る。美味も不
 味も無く、又甘くも、辛くも何とも無き味です。美味不味の差別は心の持
 方、習慣、身の工合で起る。又甘辛などの差別は主に舌の組織と身の工
 合とより起る。去れば此等の因縁が變るに従て味が變るので有る。か
 ら本來は物に美味不味又甘、辛、苦の差別は無いので、何物も美味も不美
 も、甘くも、辛くも、苦くも無い。即ち天地の理としては味の差別は全く無
 いので有る。然るに人の身又其中の大きい小さい諸の機械が人々各々異り

て出來て有り、又人と魚、獸、鳥なども身が甚しく異つて有る。加之此等の
 生物の生存する境遇及び境遇の變化などが因縁となりて、物の味が人
 々や其他の生物に從て異なりと感らるゝのです。
 斯く申す丈では未だ判然と解りますまい。甘い辛いは天地の何處に
 ても極つて居ると多くの人は思ひまじやう。そこで色々の例を考へて
 もらひ度い吾等が辛いといふは舌を突く如き味を云ふので、鹽の如き
 は人には辛い、海水は辛くて其儘では口には入れられぬ。然るに其辛い
 鹽水の中には魚も住み、貝も住み、龜、鯨、豚、獸なども住む。若し鹽が人の
 味ふ如く彼等にも辛く有らば、彼等は逆も海中に生息して居るとは出來
 ぬ。吾等に空氣が香も味も無きと同じく、鹽は彼等には味は無いので有
 ると斷言してもよからう。唐辛は剛く辛い物で大方の人には食べられぬ
 が、又之を嗜む人も有る。斯う云ふ人に辛からぬかと言へば、よも左では

人は舌に騙さる

有るまい辛さが剛く當らぬ舌作で有るで有ろう然るに鼠は此辛い物を好んで食ふ彼等にも辛く有るか否を知らずと雖も吾等に感る程辛くては斯くも好んで食ふと有るまじ大方辛く無き外の味と受けるので有ろう。

身に病有る時は常には辛き物も苦く味はうとは世の人の経験して知て居るとです體温が上り下りするに從て味が變る。

酒好む人には其味は如何で有るか甘きか苦きか好まぬ吾には解らぬ飲む人は此の味を何と云ふかは知らぬが其舌には心地よく當るに違は無い飲めぬ者には剛く當りて舌を焼く思をする先づ辛いと云ふて善ろうかとも角人によりて一つの物の味が異りて居ると云ふとは真で天地の中に極た味なるもの全く無しと言ふに誤は無い。

これは甘辛、苦などの味に付て申したのですが、次には美味不味に付て申ましよう。前の味の變と同じく身の工合や身外の境遇に依て今言ふ類の味も變りますすが、前のと異なる心の持方が主に變を起こすです。

身體の工合に依て味が變ると云ふたが病重き時又前に食べた物が未だ消化れず有る時は常も美味かりし物も全く其味を失ふ又身體虛弱なる時は從來好んだ食物も厭ふに至る去れば人々により健康の程が各々異りて居るから物の味も異なるもので有る從て何物が美味とは極たとは無い。

又身外の境遇に依り常には好し物も不好となり、不好て居たものが好となる併し之は心の持方より起るので有る心に哀有るとか恐を懐くとかすれば好物も味は無くなる之と反に心に勇むとが有るとか喜ばしいとが有らば常に好ぬ物も美有と思はれる又吾懐く一つの主義

人は舌に騙さる

有るとすれば、夫が爲め從來好める物を嫌ふとなり、不味て好まな
 かつた物が美味なることになる。獸の肉、魚貝など滋養になると信ふ時は
 此等の外に美味物無しと思ふけれども、牛や馬や象が草や藁を食ふの
 みなるに、牛馬ともに強い生物で有り、象に至ては強くて其肥大たる
 は恐らく一切生物の上にあるべし之を觀れば、滋養になる食物は肉で
 は無い、野菜で有ると言はれる。又其心で野菜を食べて見ると肉よりも
 美味ある牛馬象が野菜計で外のものを食はぬは、野菜が美味と思ふて
 居るからで有る。
 心の持方で物の味は著るしく變る生物を天地の中最も美味と思ふ
 人は其生物の皿に登る迄を考へてもらひ度い其苦痛を思遣れば、皿に
 盛れる佳物、魚にまれ鳥獸にまれ口に入れる勇氣も出でず、強て舌の上
 に載せても美味とは思はれぬ。彼等は天地を家として、楽しく生息て居

る然るに恐ろしき人と云ふ生物現れ出で、種々の武器取出し襲ひ掛る。
 彼等こゝ生命の分目と知れば、其胸中の驚愕恐怖は如何計で有ろうか。
 有る獸は抵抗もし奮闘もするが、遂には敗ける。臆けるものは逃ぐるを
 をも得せずして、只戰慄く計なり。瞬間に生捕れ、或は射殺さる。牛馬豕
 羊の如き家畜として常には食物を與へ、寒暑の害無からしめん爲め、手
 數を入れて養育るを見れば、如何にも慈悲深きが如くなれども、それは何
 時かは殺し食はん爲めの用意で有ると思へば、人は誠に恐ろしい生物
 で有る。愈々となれば常には馴たる生物、小屋より引出さるゝ時は、又何
 か美味饗應に預ると思へば、左では無く屠所に連行れ、見慣れぬ四境
 の趣、粗魚き取扱に始て事の容易ならぬに氣付くなるべく、其時の心
 地は如何ならむ。孟子に齊の宣王が牛の屠所に牽かれ行くを見て、吾其
 穀觶として罪無きに死地に就くが如きを忍びずとて、之を羊に易たこ

人は舌に騙さる

ぞが書いて有る牛も羊も殺すとすれば同じとでは有るが、それは王が牛
 を見て羊を見ぬからで有ると孟子が言ふたは王を慰むる爲めで有る。
 次で君子の禽獸に於けるや、其生るを見て、其死るを見るに忍びず、其聲
 を聞いて其肉を食ふに忍びず、是を以て君子は庖厨を遠ざくと言ふた。
 其殺されて皮剥れ、腸繰抜き、胃腑裂りて、赤きと黒き、血滲は溢れて血海
 漂ひ、肉切、削き、血染の白骨折取り裂取る、慘然しき有様、眼前に浮出て
 肉を盛る皿見るも、恐ろしく吾腸迄も裂り出さるゝ心地こそすれ、何と
 て之を美味と思はん。
 斯の如く味は甘き辛き苦き類でも、又美味き不味き類でも、天地の定
 まつた理では無い、色々の因縁で起こるので有るから、常に定まりは無
 い、從て吾等の感は正確で有ると思ふは大きな誤で有る。

人は身に騙さる

次には身に付て申しましよ、人病によりて、身體癱痺れ互りては、皮
 膚に感觸は無くなるから、痛い痒いは分らぬは、勿論の事、身體健で有れ
 ば、痛い、痒いは分る然るに、これも身體の組織内外の状態、心の持方によ
 りて、感が違ふ去れば、寒暖の感方が人々に依つて異なりて有る、又同じ
 人でも、時によりて違ふ、寒き時浴湯に入らんとするに、始は其温度強
 して堪へ難く有ても、暫く忍べば、微温と思ふに至るは、人々の能く知る
 處です、日本の人の坐方は、西洋人には甚しき痛を感えしむ、併しこれに
 慣るゝ時は、痛も知らぬに至る、重荷を肩に載るにも、始ては堪へられぬ
 けれども、日々荷負ふ者には、痛は知られぬ、此等は皆習慣に依りて變る
 のです、又火の身に觸れて之を熱からずと云ふ者は、無いが、灸を好む人

人は舌に騙さる

は大きな燃草を皮膚に据て、火の燃ん計になりてもさして熱しとも感
 えぬ又戦争の最中に彈丸や刀劍で大傷を受けながら痛を知らず人に
 助けられ病院に連れられて後始て痛を感ゆるに至るとは、幾度か手負
 受けた人から聞きました是は心の持方が戰場に在る時と人に助けられ
 世話受ける時とで違ふからである私は蚤に噛るゝとも痒は少しも感
 えず蚤多き所に寝て體の彼處此處蚤數多這廻る時痒は能く之れを感
 えて居る併し噛むとは心付かぬ翌日痒を見れば星散したらん如く夥
 しく小さき赤星が有るして見れば蚤は確に噛んだので有るが吾には
 何とも感えぬ人によりては蚤を悪しと夜夜中蒲團の上より部屋の上
 隅迄蚤逐駆て大騒し朝には昨夜の敵これ見よと大仕掛に蚤殺に取掛
 る私は蚤を餘り悪しとも思はず膚に留れば留れば棄てゝ置く蚤も吾
 心を知つてか悪戯をせぬ然るに蚊は私の甚く嫌ふた蟲で有つた蚤に

比ぶれば彼は男らしい處が有る蚤は人を攻める前に何等の宣戦布告
 をせぬが蚊は遠くより近くなる迄陣貝吹出て攻来る、あな天晴の舉動
 かな吾は此陣貝の響を好まず一聲之を聞けば總身に痒を感へたりそ
 こで右手を左手に擴げていざ来いと待構ふ蚊は夫と知てか知らずか
 陣貝吹止めて吾膚劈ざき血汁を吸はんと飛付く處を力に任せて、ばつ
 しと打ては膚は痛んで蚊は飛んで去る斯の如き奮闘度々の中何時か
 は蚊に噛れ膚腫れて痒さ堪へ難く一週の間に益々膨脹れて腫物とな
 る於是強き稀硫酸を塗りて之を腐し痒を痛に變へたそれほど迄蚊に
 敗けて居た今に吾腕其外に白き斑文が痕を残して居るが、そは皆蚊の
 噛んだ跡です吾斯く迄蚊に困たは何故ぞと熟考ふるに全く蚊に對
 ふ吾心の持方が誤りて居ると心付いた蚤には心善く交際ふて来たか
 ら蚤は吾を害はぬ善哉以來は蚊にも心善く交るべし彼噛んでも許し

人は舌に騙さる

遣り、之に復讎するをも廢むべしと心を定めた奇妙には、其後は蚊を
恐れず、又蚊に痒き煩を興へらるゝとが無くなつた。

新に吾身の上に何物かを載せる時は、忽ち其重みを感じ、ゆれども慣
れば重きものも重しとも何とも知らぬことなる。人の足くびより上頭
に至る脚、股、胴、首、頭を合せ、十貫目、十五貫目、尙ほそれより重きも有り。
扱て此目方が兩足の上に載せて有るに、人は其重荷を足が負ふて居る
と思ふとはせぬ。長き道程を旅するか、又急ぎて走る時は、足の疲勞は感
ゆるが、足くびより上に重い體有りとは心付かぬ。又手にて餘り重から
ぬ物持ち續けば、始は殆んど感は無いが、追々に重を知るに至る。然れど
も己が腕、其物も目方ありて重と成りて有るには、思が至らん。又頭の
上に胃子を戴く若し、手厚き物なれば、忽ち頭に重荷を載せたりと知る。
然るに自己の頭は胃子より重いにも係らず、人は誰とて此頭は困た重

荷で有ると云ふ者は、無い。只頭に病ある人は、其重きを訴ふるに有る。
併し是も實目方が増したので、無いなるほど、血の頭に登る時は、血が
増加したのでは有るが、實は増したる血は、自分が感ゆる重い目方ほどに
増したので、無い。頭の状態が常とは變つたから、それを重く成つたと
想像るので有る。

人の所謂心(意)と真心

上には眼、耳、鼻、舌、身の作方が拙いから、その働も限が有つて、天地一切
事物を表から裏迄貫通して見抜き、知抜く力は無いと云ふを申し、そ
れが爲人は、誤に陥るを説きました。然るに此五官が力無い丈では無
く、心の持方が手傳ふて更に誤を増すので有ります。其事も上に序なれ
ば、已を得ず言はねばならぬ處では、少し申置きましたが、今此處で専ら

人の所謂心(意)と真心

其事を説きましよ。そこで心と言ふとを説かねばなりませぬ。世の人が言ふ心とは眞の心では無い。これを詳に説かんには中々入込んで六ヶ敷なるからなるべく解り易き處で止めて置きますが、先づ眞の心とは宇宙に擴がり充ちて、少しの缺けた處なく、一切萬物に貫ぬき從て吾等の身體にも寸隙無く充ち満ちて居るのです。毛髮爪の中にも充ち通して有る世の人はそれを知ぬから、心とは身の中の何處かに在るもので、形は先づ圓い物ならんと思ふて居ます。其様な心は何處にも有りませぬ。美しいと思ひ醜と思ひ、痛い痒いと思ふが、心で有ると人は思ひます。そこで先づ申して置くところが有る。右に云ふ如きは人の意で、眞の心では無い。強ひて言はゞ心に二つ有る、一つは眞の心、これは本來有るもの、これを眞如とも佛とも如来とも佛心とも申します。之は鏡の如く何物にも汚されて居ず、又何物も之を汚す能はぬ清淨なものです。

たどへて言へば塵一つ無き燈々とした鏡面の如きものです。それへ眼、耳、鼻、舌、身の官を通りて色々の物が映ります。痛いとか、痒いとか、赤い、白い、美しい、穢いと云ふものが映る。それを人は心と云ふて居るけれども、夫は鏡に映りたる影で有る。愚癡なる人は鏡に映る影を鏡と思ひ誤る。去れど影は只影で鏡に吸付いたでは無く、又鏡が爲夫汚れたのでは無い。如何なる物が映りても鏡は何とも思はず。少しもそれに頓著をせぬ。映るも、映らぬも鏡に變りは少しも無い。只だ人許りがその影に見蕩る。ので有る。それでも若し其影が眞を映すならば少しは勝で有るが、前にも色々説明した如く、五の官が皆全からぬから、映る影畫迄間違ふて映る。それを眞と思誤る、そこを無明と言ひます。無明とは無知と云ふとで、眞を知らぬとです。迷と云ふも全く其事を申します。斯く五官が外の所有事物と出會て内の鏡に映る、それから意と云ふ人心が起る、言はゞ眞

人の所謂心(意)と眞心

如^{ごと}が動^{うご}いた處^{ところ}を言^いふのであるが、併^{しか}し眞^{まこと}如^{ごと}は動^{うご}いても何^{なに}ともならぬ、動^{うご}く處^{ところ}が阿^あ頼^{らい}耶^やと名^な付^つけられて有^あるが、眞^{まこと}如^{ごと}が變^{かは}つたのでは無^ない、阿^あ頼^{らい}耶^やは動^{うご}いて生^うまれる、即^{すなは}ち縁^{ゆかり}に觸^ふれて起^おるので有^あるから本^{もと}來^{より}有^あるものでは無^ない、從^{したが}つて少^{すこ}しも頼^{たの}むべきものでは無^ない、上^{かみ}を推^おして言^いへば人^{ひと}の意^いは無^ない、云^いふは眼^めからも出^で来る、耳^{みみ}からも出^で来る、鼻^{はな}舌^{した}身^みからも出^で来るので、眼^め、耳^{みみ}などが無^なくなれば人^{ひと}の意^いも無^なくなる、それは眞^{まこと}心^{こころ}では無^ない、何^{なに}事^{こと}も無^な常^{じょう}と云^いひて、有^あるかと思^{おも}へば無^なくなる、意^いも矢^や張^{はり}常^{じょう}無^{なし}で、是^{これ}は吾^{わが}心^{こころ}で有^あると定^{さだ}まつたものは無^ない。

既^{すで}に上^{かみ}にも申^{まを}した如^{ごと}く、人^{ひと}心^{こころ}は五^{いつ}官^{くわん}が虚^う妄^{まご}を映^{うつ}して出^で来た而^{のみ}已^まならず、常^{じょう}無^{なし}きもので有^あるから、之^{これ}を頼^{たの}むとするは抑^{おさ}も誤^{あや}まり有^あると覺^さらねばならぬ、然^{しか}るにこれを知^しらぬ人^{ひと}は眼^め、耳^{みみ}、鼻^{はな}、舌^{した}、身^み、何^{なに}れも頼^{たの}みありとし、又^{また}人^{ひと}心^{こころ}も頼^{たの}みあるものとして居^ゐるから、萬^{いっ}劫^{まじ}未^ま代^{だい}迷^{まよ}を脱^{のが}れるとは出^で来^きず、命^{いのち}終^はる迄^{まで}

苦^{くる}惱^{なう}を逃^{のが}るゝとは出^で来^きぬ、加^か之^の爲^{ため}る事^{こと}思^{おも}ふ事^{こと}、皆^{みな}眞^{まこと}なりと誤^{あや}まつて、僞^ぎ無^{なし}き眞^{まこと}は終^{つひ}に解^{わか}らずして死^し行^ゆくので有^ある。そこで上^{かみ}に一寸^{いち}寸^{すん}申^{まを}し置^おいた如^{ごと}く、心^{こころ}の持^{もち}方^{かた}により、五^{いつ}官^{くわん}の虚^う妄^{まご}を増^{おほ}大^{だい}くならしむる例^{たと}を少^{すこ}し申^{まを}しましょう。

淨と不淨

世^よの人^{ひと}の云^いふ不^{けが}れと云^いふは眞^{まこと}に不^{けが}れで有^あるか、否^{いな}か、少^{すこ}し論^{ろん}らふて見^みましよう、世^よの中^{なか}で最^もも不^{けが}れと云^いはるゝものゝ中^{なか}に、上^{かみ}にも申^{まを}した人^{ひと}の身^みより下^{しも}に排^{はい}出^だす物^{もの}が有^ある、然^{しか}るに犬^{いぬ}や豚^{ぶた}は之^{これ}を好^よ佳^ま物^{ぶつ}とし、舌^{した}鼓^{つづ}うちて食^たべる、その豚^{ぶた}の肉^{にく}を反^{かへ}りて人^{ひと}が食^くふ、豚^{ぶた}は不^{けが}れとして口^{くち}に入れぬ人も有^あり、又^{また}人^{ひと}種^{しゅ}も有^ある、豚^{ぶた}は不^{けが}れを食^くふが故^{ゆゑ}に不^{けが}れた獸^{けもの}で有^あると云^いふなれば、日本^{にほん}や支^し那^なで作^{つく}る米^{こめ}、麥^{むぎ}、其^{その}他^{ほか}の野^あ菜^な、果^{くだ}物^{ぶつ}は同^{おな}じく不^{けが}れを肥^こ料^{りょう}として收^と

淨と不淨

穢れた物なれば皆不淨しとすべき筈で有る然るに此等は清淨なるも
 のとて神や佛に供御として捧奉つる人が排出して豚肉、米、穀果物とな
 る中間何點で不淨が清淨に變るので有るか豚の食や植物の肥料とす
 るには人が夫を最も不淨とする時を最も佳良とするでは無か天日に
 晒され乾燥きり灰の如き細粉となりては功能は弱なるべく豚はとて
 も之を食ふとはあるまじ斯く申したからとて此不淨と爲し來れるも
 のを食物にせよと人々に勸むるのでは無い人は何時の太古にか鼻に
 嗅ぐ色々の香を分別付けて好悪を勝手に極て來るので有る其著るしい
 證據の一つは隣の朝鮮では人が下へ排出する水を好飲料として飲むで
 は無いか是も吾國人に真似せよと云ふではをさく無い不淨無き物
 は何にても食へと言ふ理は少しも有りません清淨ものでも食へぬも
 の、食ふに及ばぬものは幾らでも有ります又多くの人が喜んで食ふ魚

肉、獸肉の中、國により人により食ふ習慣の有るものと無いものが有
 るから、人の排出したものは眞實不淨と云ふ可きものでは無れども去
 とて之を食はねばならぬと云ふ理は少しも無い然るに此不淨に非
 ずと云ふ理を言たて、排出ものを食とする外道が釋尊の出られる迄
 に印度に在つた。

右に陳べたとは如何にも不淨しく思はれ讀む人も如斯とは宜しく
 避けて書く可ものに非ず讀んで胸悪しと言ふ人も有べし然し左思ふ
 が矢張誤を知らぬからで有る自分は不淨しき物は口にせずと思ふ人
 も能々觀察るべし其食ふものは皆清きか又不淨を厭ふ人間は自己は
 清しと思ふか清淨不淨と差別する人が自己の身體は不淨無き清きも
 のなりと思ふか鼻汁が未鼻の奥に在る間は不淨とは思ふまい鼻の孔
 より外部へ流出して始めて不淨と思ふ唾液も口中にては清く思へど一旦

淨き不淨

外に出ては不浄とせらる。又自己が胃の中腸の中に在るものは不浄と思ふものは有るまい。若し他人の胃腸なれば其中のものは不浄と云ふで有ろう。己れのものも外に出れば刹那に不浄の扱をする人は吾指吾手、吾腕、吾皮膚は清らなり。殊に入浴せる後は最浄なりと思ふ。然るに其指一節過まつて切れたりとせよ。其落ちて有る指は矢張清かと思ふか。指先の爪も身に附く間は清しと扱はるゝが、切離しては暫くも保持つとはせず。不浄のものとして直に取棄る。吾口の齒は清しと思へばこそ之もて食物を噛む。然るに齒緩びて抜落ちては、不浄と思はれ中々之を元の口に入れ試みる。とはならぬ。若し右の片足切落さるゝ場合に、は吾足なりとて左足と同じく清らかなものとして取扱ふとはせざらん。身より離れたるものは既に生命無き故に不浄と云は、魚貝、鳥獸の死にたる肉を淨として食ふは何故ぞ。

こゝに誠に可笑い論理が出来た。曰く吾は人間であるから生きて有る間の吾足は清く、足死ぬれば穢し、鳥獸は生きて居ては不浄くして手を觸れるさへ厭はし、死ぬれば清くして其身食ふべしといふとである。是は吾が戯むれて云ふのでは無い。世の人は皆此戯論を日々法律として居るので有る。右の事實を言ひ變ふれば、死んだ獸より死んだ人が一層穢しと云ふとで、取りも直ほさず、人は鳥獸に劣ると云ふことになる。誠に今の人は斯の如き考を持つて居るが、人たる者が斯く迄狼狽へた考をするとは不思議。これも五官や心持で何時の頃よりか誤て來たので有る。古へに溯れば生て居る人の如く、死んだ人の體も、死んだ鳥獸に勝れて居ると思ふて居た時も有つた。野蠻と云はるゝ人種が、人肉を食ふを穢き事する無知すと云ふめれど、實は彼等は人肉は鳥獸と同じく清く、恐くは清きは勝れりと思ふなるべし。文明ては人を食ふとをせず

なつた其故は人は鳥獸に勝るとは言ふ迄も無し、けれども其同類同連が食ひ合ふとは仁道の許さざる處で有ると云ふとが考られて來た。それより人肉食ふことは追々に停まつたは全く道義の心によるのである。然るにそれが後には穢しとの考と混合るととなつた。

事の眞理を言へば、天地の中に所有物といふ物に淨とか不淨とかの差別は無い。淨又不淨と云ふは五官に欺むかれて云ふとで有るすれば、人肉も不淨しくは無くとも人食ふとは人道に背くと知りて、遂に之を不淨と見るに至り、食ふとを全くせぬとなつたは、目出度事である。然るに人肉は不淨れども、獸などの肉は清淨として食ふは何事ぞ人肉が不淨ければ、人ならぬ生物の肉は尙更不淨しと思はねばならぬ。無いか此轉倒を怪しまず、魚鳥獸の肉を好むは慈悲を知らぬからである。人は生物は不淨と言ひながら、先にも言へる如く死にたる後は不淨

とは思はぬ。それは其肉丈では無い骨から、皮から、爪から、牙から、角あらば角迄で、人體の飾とせられる。審までも角や牙で作る之を不淨と言はず、日に三度の食に口へ入れる斯く言へば、皮骨角牙等皆能く洗淨めたるもの故不淨は無しと辨する。有るう去れば人の骨を箸にする心は有るかと言へば、身震して不淨がるで有ろう。

魚は淨しと思はれて居る鯛の如きは魚の王と言はれる。然るに人が水で死に、其屍が腐る迄見出れぬ時は、魚が集つて之を啄む。其中鯛は最も好んで人肉を食ふと云ふ面白くは無い。か日本の人々が最も珍重する魚が食人魚で有るとは、そこらは人は蟲が善いと云ふので有ろう。蚯蚓と云ふ蟲は、人は餘り蟲が好きまい。日本の人の最も好くは鰻で有る。これも面白い。人の蟲の好かない蚯蚓を鰻は最も好く、蟲で人の蟲の好まない蟲食ふ鰻を人の蟲が最も好く、これでは蟲拳を打つて居

淨さ不淨

る如くです。

鰻の序に穴子、鰻のとを一言申します。東京には穴子は有るが鰻は無
い。京都へは鰻は来るが穴子は餘り来ぬ。此三つの魚は皆形が似て居る。
根本は一種で有つたのが、三つと分れたのか。今其語原を考へると「うな
ぎ」と「あなご」とは「あいうえお」がぎぐげごの二列の音が通ふた。即ち「う」が
「あ」と通ひ「ぎ」が「ご」と通ふて居る。國に依ては「うなぎ」を「おなぎ」と言ふ處も
ある。「うなぎ」を誤りて言へば「あなご」となり易く、又倒まに「あなご」を誤り
て言へば「うなぎ」となり易い。此三つの變を「うまがな」で書けば最も見
易くなりませす。Unagi, Onagi, Anagoの如し。そこで鰻と「あなご」とは本原は
一つで有つたで有ろう。穴子など書いて「穴」の中に注む子である。と云ふ
は推測で有りませし。うそれには善として、鰻と右の二つとの血系の連は
如何と云ふに、言葉の上から其連鎖を尋ぬると、けしからぬ生物と等し

くなる。私は兼てより吾國語と「ありあん語」(即ち「さんすくりつと」梵語及び
夫より出た今の印度ありあん語、希臘、拉丁、今の歐呂巴の「ろしあ、ふらん
す、いたりあ、すべいん、ぼるとがる、ごいつ、おらんだ、いぎりす」其外の語并
に今の亞米利加の「いぎりす語」は皆ありあんです。である。と唱へて居ま
す。明治卅八年二月より月々新公論で日本語と「ありあん語」を對照て
世に發表しました。其時のHの部に此鰻といふ語を外の生物で之に相似
る名稱のあるものとを比較て出しました。夫を了知には先づ聲音を發
す時に、咽喉の使方又舌唇の用方相近き時は、甲音が乙の音に變りて、
一つの語の言方が二つ三つ若くは其以上の言方となり、遂には變つた
意味の新しい言葉が出来る。と云ふことを心得てもらひ度。此理に寄れ
ば「マミムメモ」が「パビブベボ」と唇の用方が強い弱いの異い有るが互に
相似て居ます。萬馬文、免聞等の字が漢音では「パン、バブン、ベンブン」で有

淨と不淨

るが吳音では「マン、マ、モン、メン、モ」なるは全く兩國で唇の用方に強い弱いの違が有つたからで有る此相通は何國でも有る歐呂巴でも印度でも日本でも此通音ひが有る譬へば「蛇」今は「へび」と言ふが古昔は「へみ」といふた「びみ」相通ふが故です又「はぶ」といふ恐ろしい蛇が琉球島に住むといふが「はぶ」は「行」を四段下げ又「ぶ」を「ば」行の二段に上せば「へび」となるから「はぶ」は「はぶ」は「はぶ」の言訛で有るそれから又推すと「はめ」も同じとなる「はめ」は「河内國」で言ふ外でも言ふで有ろう京都では之を「まむし」といふ人を噛む恐ろしい蝮蛇と漢字で書くくちなは、有る其「はめ」の「め」は「ま」行で有るから「ば」行音と相類ふそこで「め」と「ぶ」と通ふとなるから「はめ」は琉球の「はぶ」と同じ意となるのが了解でしょう又此「はめ」を「はみ」といふ處も有る前にも言ふ通り「へび」を「へみ」と言へりし如く「はめ」が「はみ」と同じ「ま」の行の音故相通ふて訛りたるので有る「はみ」は「はみ」

むの意より出で「はめ」は其訛で有ると速断する原語學者も有るで有るうが私は左は思はぬそは下で申しますが以上に掲げた語を集むれば即ち「へび、へみ、はめ、はみ、はぶ」で皆長蟲で有るそこで右等の音に通ふ外の生物は無きやと考ふるに「はも」(鱧)といふ魚が有ります「はも」の「も」は「はぶ」の「ぶ」と「ば」ま行相通ふが故に同じ意となり又其「も」は「め」と同じ行で有るから「はめ」となるは固より有る左すれば鱧は「はめ、はぶ、へび」と同じ語原から出でたものと推測するが出来る又此鱧は古語では「はむ」と言ふたつまり「ま」行の通です又「うはばみ」(蟒蛇)の「ばみ」は上に言へる「はみ」「はめ」と同じ語で「は」は「は」と通ふとは誰にも了知る「はみ」は噛む意より出でたりと途断は出来ぬと上に言つて置いたが前にも説ける如く吾國語は印度より歐呂巴に互る、ありあん語で有るそこで此「はみ、はむ」に等しかるべき語を印度に求むると、ひんどすたに「即印度ありあん系の

淨さ不淨

語に Dam 又 bambi「ばむ」と云ふがある、其意味は蛇又は鰻と云ふので、二つとも長い形で相似て居る日本でも鰻を見れば蛇を思出すから、印度でも然思ふて鰻も蛇も一つ名前としたので有ろうすれば日本でも「はも」とは「め」は一つ名前で「め」も「相通ふて居ると論ふたのは尤もで有ろう蛇の親類と見ゆる鰻が其親類と見ゆる」あなごとは一つ語で「あう」と「ぎご」と相通ふたので有ると解ても誤では有まい斯くして見ると「へび、へみはめ、はみ、はぶ、はも、はむ、うはばみ」印度の「ばむ」と「はも」の親類鰻其親類あなごは皆親類ごちとなる尤も之は語の上の親類から言ふたので鰻鱧蛇などが皆一つの根本から出たか否かは分らぬけれども名前のみで無く、其姿迄で似て居ては彼等の一つを見れば其親類の族類を思出すは已を得ぬとて、鰻鱧あなごを食ふ時に蛇食ふ心持する人は、此等を少しも美味とも思はず、又清淨かな好佳物とは思はぬ殊に鰻など生きながら背を斷割られ、骨取抜かれても、口を開閉して苦むを思へば、連も口に入れる心は起こらぬ。

斯く言ふ吾は鰻鱧など食べたとは無いかと人は問ふべし日本に生れては此等の長魚は一般で食べらるゝから吾とても人並に此等を食物と爲て居たとは有る然るにまだ十歳にならぬ幼兒の頃田舎に居たとが有る或日裏の貸屋に住める老翁に誘はれ鰻釣に行いた川中の蛇籠の上に沿ふて彼處此處と場を變へて釣居たるに吾蛇籠の中へ着込める竹と絲とが軽く引かるゝを覺えたから鰻掛れると思ひ先づ竹を抜去り、次に絲を引ききたるに、一つの鰻絲の端に釣られ頭を出したが、尾は何かに巻付けりと思しくて引けども出でず吾と鰻と引合ひ争へる時鰻の苦しげなる顔付を見て、此上引出すの勇氣も出でず、將に絲を放離し遣らんとする模様を見付けたる老人直に吾手より絲取り、矢庭に

淨さ不淨

引出したるを見れば、大きな鰻で有つた吾は之れで歸らんと言ふたが、老翁は未だ獲物無れば「よし」とは言はず、稍久しく老人の行き來して釣心に心を注ぐをたゞ疲れて待て居た日も暮れかけた頃、老人は鰻は捕らで「ぎい、ごりもち」など云ふ小魚幾つかを獲たのみで有れど、今はとてしぶ／＼に歸る途に就いた、今夕の饗は之よと皿に盛りられた時、箸はそれに出無く有つた釣上げた時の模様、老人の手で立割つた時の、いちらしさを思ひ、然もそれを吾が釣針に掛たもので有ると思へば、如何にも口に入る、心が出でな、だから遂に食はず措た、然るに吾幼少より身體虛弱有りし爲め所謂滋養に成るものを食べざる可らず、夫には鰻最も善しと勧められ、又西洋の學問を爲るに連れ、獸の肉も食べねばならぬと信ひ、身體の爲ならばと勝手な考から盛に魚貝鳥獸を食へるとなつた併し、心の奥底には何とやら濟まぬ思が潜んで居た、又此等の肉を

口に入る、時は匂が鼻に著き食た後には口嗽がすしては心持も善く無かつた、夫故此等の肉は何でも口にすると云ふ譯には參らなんだ。

肉 食

斯く身體滋養の爲と思ふて、日々肉食を絶たざると幾十年それで吾身が強健に成たかと言ふに、常も瘦こけて、又しても腸胃の「かたる」を起し、盲腸炎に罹り、痛風を煩ひ、喘息に惱み、腦病に犯され、神経痛に苦み、瘍、瘰癧、其他の腫物時を變へて、脹れ出で、最後に胃瘵、癰に衝かれて、教壇で呼吸塞がり、身は卒倒れて、人心地もつかずなりたり、此大事の有つた後も、色々當世の法で病を活さんと手を盡したが、何とにしても全癒らぬ、是に於て、今迄の仕來を一切く廢めて、嘗て久しく唱居たる心の教に、只管繩がり、三摩地を修めるとを勤めたが、之に依り、病は全然消滅せた。

少年の時より西洋の學問を始め、吾身體の弱かりし爲め、衛生學や生理學、解剖學などの英書は心を入れて研究び、醫學も少しは心得んとて、彼是讀んだのが、吾をして不知不識當世の治療衛生を此上無き確實なものと思はしめた兼ては心の教を唱へながら、身體のとは西洋の研究に從ふが近道なりと思ふたのが大きな間違で有つた生物の肉で無くば滋養にならぬなど教へられて、夫を眞實と信じたのが迷で有つた。上にも言へる通り牛馬象の如きは生物は蟲一つだも食はぬ然るに何れも強健な獸で有て、陸に住む動物の中最も大きいでは無いか而して其滋養物は草が常食で有るべし象の肥大なるには及ばねども牛馬も亦肥太りたる動物で、同じく草が常食で有る斯く草で出來上つた肉を人間が取食ひ、肉に非ずば人肉に成らぬと思ふは甚しき迷信では無いか斯く言ふ我も上に言ふた通り此迷の中に在つたが一度それが覺

めて見れば、今迄生物を食べて居た吾の無慈悲が染々心に感へ何故斯程愚癡で有つたかと訝しく思ふ斯く成て見ると以前植物に自然の味は無きかに思ふて居たとの又誤れるを知り、反て肉こそ何物のにせよ、人為の味を加へねば舌には上されず、植物には性來夫々異つた美味を有て居ると思ふに至つた去ればこそ牛馬象其外植物計で生命を繼ぐ動物が何國にも繁殖へるので有るそれでは肉食ふ動物の舌には其食ふ肉に味は無いかと不審る人も有ろう答へて申ます前にも言ふた通り何物にもせよ、其本來に於て美味不味と言ふことは無い、全く食ふ者の舌に某感觸を受けて心の勝手が其時顯はれ都合が善ければ美味と嘉し、悪ければ不味と貶す、即ち心の据方持方で味は如何にでも變るのです。

動物と其食物とに因る氣質の相異
肉を食はぬ動物

食物の相異と動物の氣質とを考合はして見ると、人の知て置く可き事が、それから出て来る一切の動物を擧げて書くとは此書では出来ぬから、大略に止めて置きます。先づ普通の人が見聞して知り居る動物を出して其食物と氣質とを考合はして見給へ。

馬 先づ馬から始めましょう。人の多く乗る馬を始めとし、其種類色々有て、大きなものあり、小さなものあり、又た「じいぶら」と云ふ縞斑の馬あり、又驢馬あり、驢馬と馬との間に出来た小馬もある。此等は何れも生物を食はぬ。従てそれを追駈或は害はんとはせぬ。人が養へばこそ、麥豆などの食物も日々味ふとを得れども、山野に育つ野馬では草が重なる食物

で有る。然るに人々も知る如く力は強くて、汽車電車、の無き世には此動物無くしては急速の旅はならなんだ。戦に在ては敵を攻追ふ爲には最も缺く可らざる動物で有つた。攻める時丈では無い、戦に敗けて逃げるより外知らぬ。弱い奴は馬を最も頼とする。往古計では無い、今でも同じと思ふ。戦に行いたと無き吾は其逃げる方便は今日如何で有るか。判然とは知らぬ。吾推測にはよも違ふとは有るまじ。斯く勇ましき性來で有つて、然かも人には極めて親しく、慈悲には深く富んで居るとは何國の人も古より熟知りて居る。馬が常に愛れた飼主の途中にて死たるを口に咬へて、遠道吾家に持歸り、死體を門前に卸して、己れは其側に斃れ死んだと云ふとは眞實の談で、世の人々の能く知る處で有る。其外馬が人に盡くせる慈悲の業に付ては、今詳しく言ふ迄も無く、誰も見聞くとで馬飼ふて之を愛撫する人は、常々の經驗で知て居る。

動物と其食物とに因る氣質の相異

馬は總て皆此崇高い氣質を有つて居る決めて多くある中の或馬が偶然善いのでは無い時には荒馬と云ふのが有る、それは病に罹れるか、何かの爲めに心荒く成つたので有る馬は本性穩順くあるにも係らず、吾國では酷く扱ふ人が有る、それが爲め馬を頑固なものに爲て仕舞ふ、大方の人は馬は暴れ好きの生物と思ひ、いつでも嘯付かるゝか、蹶飛ばさるゝかと思ふて居るが、それは馬を知らぬ者の誤つた考で、反て人間こそ荒易き動物で有る、一步家の外に出れば、何でも無いことに、ぼんつかれるとが中々多くある、如何場合でと説くを待たず、皆人の知る處である、馬は其様事はしませぬ。

人間の世界では仁慈の道が最も貴きもので有ると云ふことを知らせる教が有る、此教を教ふる處も有る、又之を教ふる人も有る、教の書物も有る、然も人間の世では罪無き人を種々に苦しめる者が數限り無く有る。

馬の社會には道の教など云ふものは無い、教ふる語無れば、教ふる馬も書物も無いけれども、彼等の中に罪無きものを苦しむるなどの非道事を行ふものは、よも有るまじ、彼等は教の何たるを知らずと雖も、互に悪事をせぬ、生來道の教に適ふ美しい氣質を持って居るとは、疑無い、彼等は罪惡と云ふことを知らぬ動物で、人間は宜しく馬を道義の師と仰ぐ可きなり、然るに人は己が勝手に之を捕へ、之に苦しい働を課し、勞に堪ぬ時は慈悲も知らず、鞭打ち懲す、尙其上に命を取て肉を食ふ、これが今の人間で有る人とは、假の名實は鬼で有る、生物の肉を食はぬ馬は、生物を殺すと云ふことを知らぬ、從て他の生物に向て痛を與へ、之を厭へんとする、我勝の心は無く、極めて穩和く有る肉を多く食ふ世に成るに従ひ、人間が憐悪くなるは當然で有る。

上には普通の馬に就て云ふたが、じいぶらのとに付て、一ことを申しま

動物と其食物とに因る氣質の相異

す此は主に「あふりか」の南に住む縞馬で、今迄は馬や驢馬の如く、人の手に馴して働かす習慣が無いから、其心性が馬と少しも異はぬか否かは判然せぬけれども、人には馴れ易く、温順で柔和い生物で有るとは廣く世に知られて居る。馬とは氣質が餘り異りはせぬとは明らかで、是れも勿論生物を食ふとは爲ませぬ。

驢馬も事更に云はずとも馬と大方同じと承知してもらひたい。

牛鹿羊の類「にれがみ」又「ねりがみ」(貳)獸と云ふ動物を研究べて見ましよう。此種族の中には諸種の牛、水牛、麝香牛、ばいそん、「せびう」(皆牛の種)羊野羊、「あいべつくす」、「あんてろーぶ」、「羊の種」鹿の諸異類、麝香鹿が有ります。「ねりがみ」とは植物を食物とし、働きを休む間、胃より食物を口中に吐出し、練り噛むより名付けた稱です。彼等の中野山に育ち、人の手に馴らされぬ間は、荒々敷見ゆるものも無いでは無い併し、手馴れて來れば、

何も皆柔順くなる牛は、其飼ふ人に能く親み、鹿も能く人に馴るゝとは皆な人の知る處の如し。大和奈良の鹿が柔順くて、參拜者の手より食物を畏れず取食ふとは、奈良見た人は知て居る。

此等の動物は皆生物肉を食ふとを知らぬもので有る。従て他の動物を取殺す如き慘酷とは知らぬ。彼等も馬と同じ温和な動物で有るとは、今更説明す迄も無い。此等も亦た生物食はぬが爲に、惡氣も自から發らぬことになる證據で有る。

思へば人間と云ふは慈悲排らぬ動物で有る。彼等は人道など云ふて己を最も尊きものとして居るが、人同志食はぬ丈を道と思ふて居る。即ち人道と云ふから、人さへ幸福で有れば、他の生物は如何に成ても善いと云ふ考で有る。今朝迄己れに馴親しみて有りしものを食ひ度き時が來れば、之を打殺して何とも思はぬ。殺す目的を以て馴らして置くつゝ、

動物と其食物とに因る氣質の相異

まり欺あざむいて馴ならし置き、そして後のち之れを殺ころし食くらふ何なんと凄すこい心こころでは無なか、牛うし、馬うま、羊ひつじ、鹿しかなどに、そんな悪計わるだくみを心こころに懐いだくと有あると思おもふか、獅子しし、虎この類たぐひは悪計わるだくみも時ときには爲なる、譬たとへば叢くさむらの中に潜ひそみ居ゐて、獲物わくぶつの來くるを待まちつが如ごときはそれで有ある、牛うし、馬うま、羊ひつじ、鹿しかなどは其その如ごとき惡心わるきこころを持たぬとは誰たれも疑たがはざるべし、人道ひとのみちと云いふものは恐おそろしい、我勝手われがての教をしへで有ある、人世ひとのよに惡人わるものの盡つきすして年としと共に益ます々く數かず多おほくなるは、牛うし、馬うま、鹿しか、羊ひつじにも劣おとる慈悲なまじけ知らずの人道ひとのみちを尊たふとしと思おもふからである。

牛うし、馬うま、鹿しか、羊ひつじなどの切身きりみの皿さに盛もりたるを見て、其そのれが人ひとの身みも切繕きりつくりふて皿さに盛もればこれと同じことことで有あると思おもへば、逆さかも口くちには入いれられぬ、化學せいのが分析わけで其原素そのもとを調しらべたら、大方おほ方は同おなじ事こととなるで有あろう、人ひとの身みが不淨けがらしと云いふなれば、生物せいぶつの肉にくも不淨けがらしい筈はずで有あるが、何故なか人ひとは此こを清き淨じと思おもふて支那しなでは牛うし、羊ひつじなどを神かみに供たまへる前に齊せいの宣王せんわうのとを云いふ

たが、あれも鐘かねを響ひびるとて牛うしの代かりに羊ひつじの血ちで洗あらひ清きめる爲ためで有ある、人ひとの血ちは不淨けがらしいが、牛うし、羊ひつじの血ちは清きらかとする大誤おほまちがひから爲なしたと有ある。

蠻夷ばんいの國くにでは獅子しし、虎この肉にくをも食くらふなるべし、文明ぶんめいた國くにと云いふ處ところの人ひとは、それは常つねの食物しょくぶつとして賞味あじふとをせぬ、何故なかと云いふと、此等こゝろの肉にくは不淨けがらしと思おもふからで有ある、若し淨きき食物しょくぶつと思おもふたならば、牧畜ぼくじゆ扶植ふぢす業わざを爲なると牛うし、馬うまの如ごとくするなるべし、牛うし、馬うまなどの肉にくより獅し、虎こ、狼おほなどの肉にくが穢けがらはしと思おもふは何故ななるか、其始そのはじめを尋たづねれば、此等こゝろは皆みな肉にく食くらふ動物どうぶつで、從したがつて猛烈めいれつしい力ちからあるから、人ひとが容たやすく取殺とりころし得いぬと云いふとが、口くちにする機き會あを與あたへぬからである、畢竟つひ人ひとを愛あで、人ひとに友誼ともぢを以もつて交まじはらんとし、人ひとの爲ために功益こうえきを盡つくさんと欲ほつする慈悲なまじけ心こころある生物せいぶつを、人間にんげんが慈悲なまじけ知らずに食くらひ殺ころすので有ある、牛うし、馬うま、鹿しか、羊ひつじの外ほか、以下このしもにも舉あげんとする動物どうぶつは皆みな温順おんじゆんいもので有あるに、それを幸さいとして人ひとが恣ほしいまに命いのちを取とり、之これが人間にんげんの

動物と其食物とに因る氣質の相異

權利で有ると言ひそれが人道に背くとは思はぬなる程人道と云ふからには人ならぬ生物には全く關係は無いと思ふから、それ等は如何に慘酷く扱ふても人道で有ると断めて居るので有る此恐ろしい誤信は人外い動物を苦しめて何とも感へぬ心を養成するとは言ふ迄も無い既に残忍無情の心が習慣となれば人に對ふても情の薄らぐは固より有る。

兎栗鼠の類 次には齧食の動物と云ふは食物を先づ前歯で齧り食ふ動物の種類で兎の各種栗鼠リスと云ふ飛栗鼠山鼠ももつと豚鼠(あがうてい)などで此處に申して置くことが有ります此栗鼠より下豚鼠迄の四つは皆鼠と云ふ字が附いて有るからそれを鼠の類で有ると思ふ人も有りましたようがそれは支那語にて其如く書くから世の習に從ふて其儘にして置きましたけれども實は鼠の族では無い兎に近

い生物で有ります。

右色々の兎の類は皆植物を食物とする動物で有るから他の動物を害ふとは爲す極めて柔和き性に生れ家に蓄ふて人に能く馴親しむに至るのです。

猿 猿には中々多くの異つた種類が有ります大きな狒々から手長猿尾長猿天狗猿など普通の猿とは異つたのが有る其中人馴れぬものも有て時には人を害ふとも有れど、それは恐れて防禦爲にするので有る生來つき動物を食ふ性で無いから外より危険仕向けらるゝと無くば己より進んで攻かゝるゝとは無い其人馴れぬ荒れ猿でも一度人の手に入れば普通の猿に等しく人に親しむに至る。

象 象には大きいもの、小さいものは有るが上に言ふて来た色々の動物の如く異つた種類は無い、皆同じ姿で有る此動物は陸に住む凡の動物

動物と其食物とに因る氣質の相異

の中最も大きいとは誰も知て居る然かも其從順くして慈悲心に富んで居るとも凡ての動物に勝つて居る又た其智いとも恐らく外の動物は及ぶもの有らざるべく人間に次で賢しい動物は象で有ると云はれて居る其力も又外のものに過れて居るとも人の能く知る處で有る彼も時には怒るとも有るが直ちに其非事を悔ゆると云ふとは多くの人間には出來難い善い氣性で有る或時象使ふ人が普通より大きくて重き大砲を取除けさせるにそれを終たらば其報に美味食物多く與ふる如く見せ置き象を勵まし働らかせた象は之を眞に受け直ちに大砲を取除けたが彼人は知らぬ顔して食物を與へず捨て置いた象は何時迄待ても食して呉れぬ全く欺かれたとを知るや常の慈愛い心を打忘れ彼人を踏殺した象使の妻此恐ろしい有様を見て悲哀の餘り心取亂し自己と二人の幼兒とを象の四足の間へ投入れて夫を殺した如く

吾等をも殺して呉れたら難有ぞよと高聲掲げて呼號んだ此有様を見るや象の憤怒直に静まり最と哀な悲痛の面容して暫く見つめやがて幼兒を鼻にて取上げ勞りて己が背上へ載上げ其後は甚く甚く柔和に畏みて父失なへる孤兒に何事にも命けらるゝ儘に従ひ仕へた斯の如き實話は色々有るが象の怒は根強くは無い世に云ふむくろ腹を立てるが速に従順心に歸る又象が子供を見守るとは人に勝る獅子虎など來る時は直様背の上に乗せて恐ろしき敵から獲り敵を追ふさて其食物はと言へば人も知る通り植物で有て生物は食はぬこれも亦た生物食はぬと云ふとが善い心を作るとを證して居る。

犀 犀は其大きさと力とは象の次で有る此動物も受扱悪しきと無くば怒ほるとは絶て無いと云ふて有る年若き時捕へたものは能く人に馴れて野仕事を手傳はせるとも有るこれも食物は植物で肉を食ふ動物

動物と其食物とに因る氣質の相異

では無い。従て其性質温和く人に親しむ。
 駱駝の類 駱駝は人の能く知る如く、沙漠を渡るには無くてもならぬ。動物で其性質誠に溫柔何にても使ふ人の命に逆ふと無く言はるゝ儘に勤務を爲る其食物は矢張植物で牛と同じく食物を飽む又之に似た名で違ふ駱駝と云ふが有る頭は寧ろ鹿に似て居るこれも植物計りを食物とし性質溫柔外の生物と戦ふなどは出来ぬ動物で有る又らまど云ふ駱駝に比ぶべき動物は亞米利加の其處に住み誠に危ない山路をも厭はず重荷を運搬ぶこれも植物より外は食はぬ。
 植物を食物とする動物は上に言ふたものゝ外に尙ほ有れど先づ大略に止め置き次には肉を動かふ動物に付て少し申しませう。

肉食動物

吾等が日々親しく見もし飼ひもする動物で肉を食ふものゝ中に犬が有る犬は肉丈では無い植物をも食ふとは云ふ迄も無く人の能く知る處です此動物は肉は食ふけれども悉くの生物を食ふでは無い食ひ馴れぬからでは有ろうが猫や鼠を驅逐け驚かす事はある又之を捕ふるとも有るが食ふとはせぬ猫に比ぶれば生物を食ふ嗜は寡きが如し。従て情義は中々淺くは無い犬が己を愛で呉れた人に恩を報ひ返した話は昔より人々の口に上り世に廣く知られて居る吾方も屢々犬を飼ふて其愛情の深きを日々色々の事で知つた幼兒の護衛にもなつた家の護衛にもなつた饅頭屋に飼はれ夜な〜其主人と共に夜鳴ウドンの聲に鳴連れて居た犬も有つた火の用心と小僧等の家の内外巡るに伴して鳴あるけるも有た肥前佐賀に近き徳萬村の寶林寺に寓た時寺の犬は和尚林心宗師が看經よまるゝ時必ず師に伴ひて堂に入り佛

肉食動物

壇に兩の前足を掛け讀誦に連れて吟り續けたをも思出すごの犬でも其最も好める食物を其目前に据え食ふを禁め只だそれを見護せ置きて其儘棄おき他所に行き再び元の處に来れば犬は四足を折り下に伏して食物には少しも觸れた路は無これを見ても犬の正美心を知るに足る猫に至ては逆も犬の眞似は出來ぬ其欲する食物は制めても人の傍見する透を見て急速奪取る犬と性質を異にする甚し。斯く義理を知解身を殺しても仁を爲す精神を持てる犬を又しても公で殺巡るををする犬とは限らず凡て生物を殺さず済されぬ場合には人の見ぬ處で行ふにしてもらい度い晝の日中人通繁き大道で彼處に攻掛け此處に追込み慘くも撲殺す幼兒ら其様を見慈悲深きはそれを見て無此上悲痛に沈み心強き徒は其を面白きと思ひ罪無き生物を取殺すを何とも思はずなりてそれが習慣となれば遂には

人をも殺すに至る學の庭で善道を教へても斯く理も無く生物殺すを見る習慣つけば教の効は無くなつて仕舞ふ斯なとが解らぬ今代の人心こそ恐ろしけれたとへ大道にて打殺さずとも犬取と知ては何れ殺すこと誰れも知る實人嗜む狂犬なれば人の知らぬ間に祕に捕へて處置をすべし夫をも顧みず公にする者あらば其者こそ罪科に中るが宜し今の世ほど考の乏しいとは吾知る往時には無かつた西洋では斯などは見んと思ふても見られぬ吾國人よりも肉食ふとの盛なる國人に迄で日本人は慘酷い事をする野蠻人有ると評されて居るでは無いか此等の事も米國などで吾國人を排斥ける理由の一つに數へるので有る。

熊の類 熊には種類が幾つも有つて食物も違ふて居る普通に云ふ熊は主に菜根果物で有つて蜂蜜は其好む處で螻蛄を食ふのも有る文類

肉食動物

に依ては魚を取食ふのも有る食物が斯の如きもので有るから、大方の熊の性質は温和くて、人にも馴著き後足で舞踏るなどの藝が出来る。豪猪、狸、此等にも幾かの異つた類は有る、何も長い針を厳しく身體の周圍に突出しては居るが、之を以て他の物を攻るとは少しもせぬ、たゞ外より攻らるゝ時、己が身を防ぐ爲め、若し敵が攻掛れば、損害易き部分、分は直ちに引込み、球の如く圓く成りて、敵には只た其防禦爲めの針を張出す、此時は猫、鼬、犬の如きものすら攻めるとを得爲るとなる、此生物の食物は、夫故植物、果物、小昆虫で有る。

豚及び其同種の猪、此等には變つたものが有る、食物は果物、大根、蕪、其外植物を食物とするが、猪の中には、蜥蜴、蛙、蛇などを最も嗜むのも有る、豚は野生のまゝでは植物が主な食物で、外の四足獸を獲んと攻かけるとは殆んど無いけれども、死體に出會へば直ちに喰著き、足る迄食はぬ。

ば止まぬ。

狼狐の類、狼、狐の類は犬に似た處も有るから、其の根元は犬の一種で有ると思ふ人も有らう、山犬など云ふ者は殆んど狼に似た行をする、犬は餓に迫りて悪事もするが、狼の如くでは無い、狼は全く犬とは異なつて居て、人を食ふ動物で有る、狐も生物食ふ獸で有るが、狼の程に氣質が荒んでは居ぬ、能く扱へば人にも馴れるけれども、狼や狐は犬の如き情義は無い、犬に比べては多く生物を取殺す性質を持つて居るとは誰も知る通りで有る、狼、狐、犬は元一で有たで有らうが、今は違ふ。

猫の類、猫に至ては、逆も犬の如き情義深き心は無い、たゞ食物に有付く間、其飼人には服従はするけれども、目離すれば直ちに悪事するが、彼の性質で有る、其悪性有るが故に、生鼠を取るとに巧みなので有る、犬は逆も此業は出来ぬ、但稀に鼠取るとは有りもすれど、食ふ爲には非ず、只

肉食動物

戯にする生物を捕ると云ふとは、極めて悪賢く無くても出来ぬ何故なれば取る、方は己の命を失ふので有るから、無間斷心を四方八方に配りて、いざと言ば抵抗か、逃走るか、心の準備を爲て居るから、容易く之を取押へるとは出来ぬ、そこで取方では、その餌を逃さず、又之に害はれぬ爲、百方心の中に計算を凝らしつゝ、有るとは云ふ迄も無い猫が鼠捕へんとて如何に賢く見隠れるかを見よ、全く人間の戦に伏兵の潜伏つに同じ悪事に斯く鋭く、智慧は慈悲とは全く反對で、残酷悪性を凡ての生物に向け、從て人間に對ても愛情い心の無いとは明かである、其人に愛敬く見ゆるは己を愛て食物呉れんと欲むる諂で有るとは確然である。

猫の同族には獅子、虎、豹が有て、其等の中で又色々の異なつた變形が有る、何れも獸の中最も恐ろしい猛悪き動物にして、小き昆蟲の外所有

生物の彼等に取食はれぬは殆んど無かるべし、彼等は生ける物を見れば生かしては置かぬ、其處は人間と似て居る、彼等は食へると思へば何生物でも取殺し、食へぬものでも己れに攻かゝる生物は生かして置かぬ、人間がそれと同じとて有る、大きいも、小さいも、撰は無い、食へると思へば取殺す、食へぬものでも勝手に都合悪しくば直ちに取殺す、人は萬物の靈長で有ると云ふ、生物を勝手に取殺し、取盡しても痛とも哀とも思はぬ、業する者を靈長とは何な顔をして言ふか。

動物の色々異つた種類は、まだ多く有つて、數へ來れば際限が無いから、先づ上の大略に止め置きます、其種々の動物の中、或物は植物の外は食はず、或物は植物も肉をも食ふ、其中にも差別が有つて、或物は小さき生物より外は食はず、或物は殆んど所有動物を取食ふ、而して此の食物の差異と食ふ者の心とを考ふるに、上にも言ふた通り、植物より食

肉食動物

はぬ獸類は慈悲心に富み、多くの人の出来ぬ善事をする。又生物の肉は食へども、たい時折の餌として之を樂み味ふ位で、何生物でも取食はんと試みざる獸類は時には荒れるとも有れど、常には温順く、又往々人も及ばぬ慈悲深い行を爲る。然るに間がな透がな生物ござんなれ、いざ食物にせんと待構ふる動物は寸分も慈悲の心無く、たい鬼々しい計で有る。

食物と道義心

繰返して申す、食物に依て生物の慈悲心が深いか浅いか、又それが有るか無いかの差別が斯の通り明になつて有る。暇々言ひますが、生物の肉を食ふとを好めば好む程慈悲心が無くなる。肉を食ふとを好むに従ひ、其肉の生物を取殺すことを傷心しとも思はずなり。之を殺すは當然

と思ふに至り、遂には殺すことが愛度と思はるゝに至る。虚言と思ふ人は少し願うが善い何か祝事をする時には必ず色々の生物を殺して、其肉を饗應に供へ、主も賓も喜び味ひ殺されたる生物の大苦痛のとは毛程も思遣らぬ。食ふ人は其肉の切片を口にする時、其肉は鯛か、鯉か、鳥か、牛か判別ぬとは無い。此鯛は美味ひ、此牛肉は柔かいと思ふは、其肉の本來の生物の姿が心眼に浮ぶから思へるので有る。若其本來の姿が心に浮ばねば何を食て居るか判然ぬので有る。其本來の姿が観ゆるからには其肉の形となる迄の經歷も大略ながら心眼に映らねばならぬ。すれば其生物の苦痛も思遣られねばならぬ。筈で有る。然るに夫が何とも無いと有らば食ふ人の心には、ともかく人ならぬ生物に食ふては些少だも慈悲を持たぬので有る。何と辯解をしても慈悲に缺けたる處が有るとは隠されぬ。上にも繰返して言ふたが、今こゝに又三度目繰返して

食物と道義心

申ますは吾も往時は慈悲を缺いて居た一人で有りました或生物の肉は世の人普通に賞味ふても吾は食ひ兼ねたものも色々有る又凡ての肉は魚にまれ鳥にまれ獸にまれ夫々異つた臭味が有てそれが後まで口の内外に残るから心持は善く無かつたが幼稚兒の代より食へ来れるものは之は人の食物と慣れて食べては居た。

斯く世の人も食ひ己も食ひ慣れるから之を當然と思ふて慈悲と云ふ考は全く忘れられるので有る夫故人に對ふては吾生命をも犠牲として捧ぐる大慈悲ある人でも人ならぬ動物の肉食ふとを好むのが有るとは云ふ迄も無い之は世の習慣の爲め慈悲心の一部が隠れて仕舞ふたので有る世の久しき誤りを誤りと心付かずに居る誤りで之れ即ち迷執と云ふもので有る。

往時は生物とても重には魚を食へた時には鳥も食はれたが鶏など

食はぬ人は多く有つた今でも古き美風を守る老人は鶏も牛も食へぬ又往時は猪鹿などは最も稀に食はれた佛の教も今よりは眞面目に承られたから放生池など有り又死人葬る時棺送くらんと聚集ふ人々への饗應或は聖靈の周忌には植物の外用ゐるとは爲なんだこれは世の一般の風習で有つてせめてもの慈悲を想起す美しい習慣で有つた其時代の人心は確かに今よりも濃厚で有つた然るに今は食物と云へば生物の肉に限るが如く成つて忌日は言ふに及ばず壯嚴を極めた葬送の時にも来る人々への晝餐も晚餐も禽獸魚貝の饗以て取爲し今日は亡者送る哀悼極み悲愁の濕内外に充ちて常に空に浮き心今は沈める胸底の憐情心の湧出て生きとし生ける生物の命斷切る行爲じと思ひやる可き折なるを可惜生物打殺し弔ふ人の新饗とする弔ふ人も舌うちて味の佳不佳口走る心の中に憐みも悲も早や消果て、弔ふ心少し

だもなし。

然も可笑い事は棺愈よ門を出るや、其側に金色に塗飾りたる鳥籠の甚大きやかなもの、中に鳩數多を入れて有る何にするぞ世の人の知る通り、今日は殊に憐れをする日、有るから鳥を放ち逃がしてやると云ふので有る鳩は皆鳩飼ふ人の鳥屋から取來つたので有るから、之を開放つと直ちに自己鳥屋に歸るとは人の皆知て居るとで有るでは無い、かそこで又思かな人が賢い人が、ごちらが考へたかは知らぬが、鳩は右の如く飼鳩で有るから逃しても憐れにならぬ、雀を放つが善いと云ふ雀が今にも毛を抜かれ腹立割られんとする處を放ち遣るならば如何にも功德で有るけれども、葬式に雀を放つと極た習慣が有るから、常々生雀を飼置きて葬式ある家より買ひに來るを待つ居る又鳥屋に善無くば、野そだちの雀を生捕にして買人の言ふがまゝ、幾個でも賣付けるそ

れを葬式の日に放して遣るそれが何故功德になるか、野や田に居る雀は其處に自由に飛び又休るとが何よりの幸福で有る然るに葬式を役る爲め、綱や奔に懸られ手握にされて狭少い籠に打込まれ、何日の間、生の里には歸られず、大方親同胞子友から引離され、籠の中に朝夕悲しい生涯を過すと云ふとは甚しい苦で有る、斯の如きと吾が今言ふ迄も無く誰にも了解て有る可きとで有るに、葬式に此事が中々盛んで有る、悲哀の極善事を爲んと思ふ心は美けれども、自己に樂み居るものを捕へて苦しめ置くとは何事ぞ人は何れ開放つとは知て居ても雀は知らぬ、又人が何れ放つと始より極めて居るならば、何故始めに態々生捕して苦めるか、愚と云ふにも程が有る、此放鳥を行ふ葬式は目に一丁字も知らぬ教育なき人のみが爲るか、と云ふに中々、そうでは無い名有る人の催す時にも之が有る、何たる戯劇ぞ抑も斯の如き滑稽はたゞ滑稽と

食物と道義心

して看過す可らざるに有る其故は斯迄に愚かしい事をする人は愚
 しさの底の人かと言ふに右にも言ふ通り中々愚では無い社會では色
 々込入た業を爲る人で有る而してそれが上に言ふ如く家内の悲哀に
 心も沈み平常の我慢の病も薄らぎ多 少 慈心の起る可き時で有る
 又吾國にて佛の教を幾何持て生物殺すことの悪かるとも彼是聞いた
 とも有る身ながら我慢が強きが爲め慈心の表顯るゝとが極て寡い從
 つて慈心と我慢とが同時に働いて遂には我慢が外つらへ出張る夫故
 放鳥と云ふ慈悲も出るが其仕方が滑稽に成終り又一方には滑稽なが
 ら放鳥の慈悲を行ひ他方では吊の人に生物の賑を爲ると云ふ右左の
 合はぬとを爲るので有る放鳥するは古代以來日本人に教へられ來た
 佛の道に從ふたので有るが今するのは芝居である。
 又吊にも生物食ふと云はまつたく西洋人の言ふ處に迷はされたの

で有る彼等西洋の人は言ふ禽獸魚貝其外何生物にても人の爲に作ら
 れたる物で有るから其吾等の食物に適ふ物は之を殺し食ふも何の憚
 かる處は無の之れ人の天より與へられたる權利なりと嗚呼此言葉を
 聞いて人は皆道理と思ふか乞ふ少しく論らはしめよ餘りと言ふも言
 足らぬ迄無情なき言前なるかな言語道斷とは此言で有る嗚呼哀れな
 る生物かな彼等には思を人に通はすべき言語を持たぬ物の哀れを知
 る人は彼等の舉動や悲鳴吠聲 吼聲は人の彼等を殺さんとするに當り
 或は哀 訴へ或は權利を言張り或は力を以て防がんとするの意思を
 表すなりと解ることを得ざるか道理は人間に而已あるに非ず生あり
 感あるものが痛を知らざるとや有るべき痛を知らば之を避けんとを
 欲し之を與ふる者あらば之を防ぐは彼等の正等權利では無いか只だ
 彼等人をして言葉もて之を覺らしむるに能はざる而已是れ言語互に

通はぬ人間の間に於ける場合と同じく若し此場合に甲が乙に
權利をし吾には殺す權利有りと言ひて恣に之を殺し剩へ之を食ふ
たらば何と謂ふか此暴横なる行は世界に今に有る人は是を蠻奴と呼
ぶでは無いか然らば人が言葉の通はぬを幸とし自分勝手の言論を拵
へ己と等しく生きる權利ある動物を殺戮して之を食ふは野蠻と言は
ずして何と云ふべき今や日本も此非道言論日々盛んに廣がり肉食の
蠻風を以て文明世界の美風なりとするに至つた人には非すとて生命
有り痛知る物を塵ばかりも憐む心無く殺して之を正理とするは遂
に人をも容易く殺すに至る世を作りつゝあるなり。

食物にする爲め丈では無く尙ほ其上に生物を殺すを無上樂とする
者が新しき世となりて後年々其數を増して來る時には流丸で人も
序に射殺す者もある然かも斯の如き場合に其殺人者が重罪に問はれ

たことも聞かぬそれ故冬の間は閑寂な田舎に住ふは危険なこと限り
無く田舎住居の頃度々家の内外に流丸の飛來つたのが有つた幸に事
無ければ公に訴ふるも煩く又其人影も早く見えなく成るものから打
棄て置くが今日の常で有るそこで徒者は益々跋扈ることゝなる此風
愈よ擴まるに連れ幼児など面白きものに思ひ大人に倣ひて生物取殺す
を無上き快樂とし知らず識らずの中に殘忍い品性を國に養ふととな
り世の亂るゝ基を作りつゝある今の有様を觀ては誠に痛歎の極で有
る。

生物への仕振如何にも觀るに堪へぬ事書けば限り無いが今は大略
に止め置きますそこで右に申す如く吾等は生物を殺す權利は持たぬ
斯な言葉が人たる者の口から出るとは凄い事では無いか之は獅子や
虎の考で有る若彼等が人の使ふ語を有て居たらば人を食ひ殺すは吾

食物と道義心

等生物の權利で有ると言ふに違無い世人よ暫く位地を變へて考へ見よ獅子虎が人よりも巧者に成て劍や鐵砲を以て吾等が家内に親子夫婦が打集り楽しく談話を爲て居る時或は今日は野山に花を見んと互に手を引き田の路道遙きする折或は作れる物商はんと背に荷を負ひ大路小路を賣聲揚げて歩む時獅子虎踊出で吾等を捕へ吾等を刺殺し射殺すとあらば人は之を何と思ひ何と言ふか獅子虎は人の持つ如き劍や銃は持たぬ併し彼等は生れながらの武器を持って居る此の恐ろしいとは想像ふ書では無い吾國にこそ無けれ海の彼岸の朝鮮支那印度などには今にも屢此恐ろしい出來事が有る此外の廣い國には大方猛獸を平げたりと雖も處によりては稀には有る世の人は之を災禍と言ふが人ならぬ生物に取ては人間が最も無情で最も峻烈い慘酷い生物で有る人の外の生物は或種の他の生物を殺すのみで有るが人は一切生物を殺す悉く之を食物とはせぬが飾にしねり學問の種にするので有るから有らん限の生物の異なる種を取殺さねば止まぬ然かもそれを憐れとも何とも思はぬ思へば思へば動物の中で人ほど恐ろしいものは無い。

恐ろしい人心の起る原因

此恐ろしい人間の心は何から起つたか又人の心は其本性斯の如き慘酷きもので有るか人の心が本性慘酷いとすれば人の中に慈悲の凝固つた悪性の少しも混らぬものも有るは何故で有るかと云ふ不審が起る又それを倒にして人の心は本性慈悲深いもので有ると言へばそれが何故慘酷いものとなるかと云ふ不審が出る然らば人の心は本來善い悪い兩の本性を混せて有つたと言へば矢張り又何故或人は善く

恐ろしい人心の起る原因

なり或人は悪くなり或人は善悪を兼ねるか云ふ不審が起る。

此三の不審を裁断するには先づ慈悲を知らぬ心と云ふものを研究べ
るが宜し此慈悲を知らぬにも三つの場合が有る一つには外のものゝ
苦を見それを苦と知りながら哀と思はぬ心二つには右に云ふ心が進
むと外のものゝ苦になると知りつゝ苦を興へて哀と思はぬ心となる
三つには外のものゝ苦を見ながらそれを其ものゝ苦で有ると知らぬ
心

第一の外の苦を見ながら又苦と知りながら哀れと思はぬ心は何故
其如くに成て居るか其理を尋ねると外の者は如何でも關はぬ我さへ
苦無くば善と云ふ心で有る即ち外のものには有りても無くても同じと
我さへ有らばよし我は天地の中最も善い者最も重々しい者最も無く
てならぬものと云ふ心で有る我は斯の如き者で有るから我身には聊

かも苦有てはならぬ我身には缺乏有てはならぬ我身には成る可く多
くの福無かるべからず外より増たる幸有らざる可らず何物何事にて
も心にも身にも幸福を興ふるものは外の者より多からざる可らず否
外のもものは一つの幸無くても關はぬ天地の一切幸福は皆洩さず我が
身の上に集まらざる可らずと言ふ心で有る一口に言へば一切の苦惱
が外の者に降掛りても關はぬ我には一切の樂來らざる可らずと望
む心で有る是即ち貪欲の心で有る此貪欲の心の爲に外の人の苦を見
ながら又知りながら哀と思はぬので有る。
然らば貪欲の心は心の本質で有るか若し心の本質で有るとすれば
心は生來いて慘酷いもので有ると云はねばならぬけれども爰に今一
歩進んで考へねばならぬ心には何故貪欲ると云ふと有るか云ふ
不審を起して考へて見ると貪欲るには何か目的が無くてはならぬ目

恐ろしい人心の起る原因

的とするものが何も無ければ貪欲の種が無いから貪欲の心は起らぬ。して見ると貪ぼる心と云へば必ず貪ぼられるものが心の外に有る。即ち貪る心と目的の物との二つが有るとになる。然るに目的無ければ心に貪欲が無いので有るから、只心と其目的の二つとなる。そして見る心には本来貪欲は無いと云ふことになる。貪欲の無い心は善い心で有る。即ち清浄な心で、それには曇も塵も懸つて無いので有る。これが本来の真心で有る。

其本来は心が心の外の何か目的に出會ふと貪欲が起る。清浄な心が忽然曇るけれども如何なる目的が來ても曇らされずに居られるので有る。曇らされるは無明が動き出たからで有る。無明が出るとは何と云ふ理かを知るには、此書の開卷に説いた眼耳鼻舌身の説明に戻つて考へてもらひ度い眼に見るものは皆色が有る。それは本来美も醜しも

無いが、眼の作方が拙いから、美しくも醜くも見える。又遠くのものには小さく見ゆる。餘り遠く有らば見えぬ。すれば眼で見るとは皆眞實では無いと云ふとを詳しく述べて置きました。次には耳に聞く聲も間遠鼻舌身に受ける外部の一切事物も皆眞實では無く、虚妄で有るとを詳らかに説いて置きました。今更重ねては申しませぬ。斯の如く人間でも、人の外の生物でも、皆此五つの機關で見知るとを虚妄とは思はず。眞實と思ふが無明で有ります。其無明に迷はされて、眼に美しくも無い物でも美しく思ひ誤り、これを取りて我物に爲うと思ふのが貪欲です。即ち欲いと云ふ心になるのです。耳鼻舌身から入る事物も皆其通りに無明の迷で、或ものは我物に爲し度い、或物は我より振離し度いと思ふのです。物欲しやと思ふ貪欲は斯の通りにして起て來るから、前に眼耳鼻舌身の所業が皆誤つたとを爲して居ると説明した處を能く能く讀んで、再も三度

恐ろしい人心の起る原因

も幾度も考へ又上に説明した丈では無く、それに順へて天地の中の有事物を細に観察して、一切の物事一つとして眞實に吾等に知るゝもの無いとを證めてもらひ度い人間と云ふ人間は天地の所有事物を皆間違へて居ると云ふとが心に判然無解れば、貪欲と云ふものは如何にも誤つた迷で有ると云ふと、欲がると云ふとは煙を捕へんとすると同じと有ると云ふと、物欲しき爲めに色々の事を企むは、只だ苦を獲む計で、何等眞の幸福を得る譯では無いと云ふと、貪欲を遂げんとて外のものに苦しめるとも結局何の得る處も無く、只罪を作る而已で有ると云ふとが皆覺悟つて來る。斯の如くに天地の一切事が正覺れるならば、如何なることにも迷はぬから本來の眞心が曇ることが無い。眼耳鼻舌身は迷の媒介を爲るもので有るけれども、無明に取著かれざれば眼耳鼻舌身が如何に誤を心に傳へても迷ふとは無い、從て貪欲の心も起ら

ぬ上に言ふた言葉を以て言へば、心と目的とが有る、其間に眼耳鼻舌身と云ふ媒介が居て、其目的を心へ寫し傳へる。其時目的となる事物の眞實の本質が心に寫さるゝならば、心は眞實の事物を知るもので有るけれども、前に説いた通り力弱くて極て出來の悪い眼耳鼻舌身と云ふ五つの機械で寫すので有るから、心の外は一切事物が皆曲つたり歪んだり、其外色々に歪化した姿で内心に寫るそれを内心が覺つて此五つの機械で寫し來るものゝ姿は悉く歪ふて居ると知らば、迷ふとは無いので有るが、其寫る外の事物も寫影も皆眞で有ると思ふが、迷の始で有る。其寫る姿即ち五つの機械で見知る一切の事物を寫つた儘に受取らず、事、其事物、其物に就て眞實に觀察する時は迷と云ふとが理解する。そこで疑問が起る。吾等人間は皆眼耳鼻舌身有ればこそ心の外の萬物を見知ることが出来る。然るに此五つの仕掛が出來の悪いもので皆

恐ろしい人心の起る原因

虚妄を寫して居ると云へば、此等を捨て、外何物を用ゐて心の外の事物を如實に觀察する事が出来るか。

禪 三摩地(略めて三昧と云ふ)

Dhyana

上にも陳べた通り人には心が二つ有る。一つは本來の心、二つには眼耳鼻舌身を通りて外の事物が觸れて起る心、即ち意、有る之が誤の心、有る夫を捨て、本來の真心を發揮す方便を爲るに依りて始めて誤即迷を脱れる。左するには如何するかと云ふに、禪那と云ふ方便を用ゐる。こゝで其事を説く前に一言申し置く可きと有る。

禪那とは梵語で Dhyana と云ひ、定る、又靜に慮と云ふ意で、世の中の事、又吾身の事、又吾意に思ふとを悉く打捨て、所有心の縛を切放ち、慮を靜め、心の塵を拂ふて、誤迷を脱れ、正しい理に還る道と云ふと有る。其

禪那を短く云ふて只禪 Dhyana と云ふ。日本の發音にも、支那の發音にも言ひ難い音で有るが、先づ近き音で言へば「ぢやん」長くは「ぢやー」などと云ふ外は無い。そこで支那では昔より禪の字を當て、日本では「ぜん」と讀んで居る。禪なる文字に意が有るのでは無い。
又今一つ誤の無からん爲に言ひ置く可きと有る。今禪と言へば禪宗に限りて有ると、世人は思ふて居る。それは大きな誤で有るから、能く今次に言ふとを考へてもらひ度い。

上にも幾度も言ふた通り、人は眼耳鼻舌身と夫を媒介として出來た意、とで無くては何事をも知り又考へる事が出來ぬけれども、それは誤より知る外は無いから、此六つのものに依らずして正しく一切理を知るに至る方便が無くてはならぬ。その方便が上に申す如く禪、又禪那と云ふのです。そこで佛にもせよ聖人にもせよ、如何に口を極て法教

禪 禪那

を説いても右に云ふ如く其法教通りに覺らせるとは出来ぬ何故なれば度々申す通り眼や耳やの五つの機械から入るとは誤で有るそれ故佛や聖人の説法を只だ眼で讀み耳で聞く丈では矢張り誤つて入るから畢竟何の益にもならぬ又佛でも聖人でも眞の事を説くと云ふとは出来ぬ何故なれば人の使ふ言葉や文字は皆假のもので眞の事を現しては居ぬ譬へば犬と云へば四足の獸と直に解ると云ふかも知らぬが犬にも色々毛色も變り大きさも違ひて今一つの某犬の舌を少しも間違へず人に説明かすとは出来ぬ犬見た人の眼の中に寫る犬と聞く人の心の眼に現はるゝ犬とが少しも違はぬ如するとは出来ぬそこで佛は數多の法を説かれたと言ふが實に一字不説と云はれた如何にも其通り言葉や文字は斯の如くに力弱きもので有るから只だ法を聞いた、經を讀んだと言ふても其言葉其文字の眞の意を心に誤無く傳へた

に非ざれば何の益にもならぬ去れば諺にも論語讀の論語知らずと云ふ通り幾千度讀みても意で讀めば元の愚者と少しも變化は無い誰も能く聞くまで有るが幾十年間寺で催す法談には必ず缺さず聞きに行く老嫗が法談終て寺の門立出るか出ぬかに吾家の若娘責むる小言を同行に言ふこれは戲言の話では無い法學ぶ者法説く者法聞く者の中斯の類は幾何有るやら分らぬ斯くなる理由は右に申す方便を用ぬからで有る。

論語讀が論語知らずになるも只だ論語の語句而已を人意で見ても讀んでも聞いても仁義忠孝になるものでは無い此四の字を讀得ぬ者は多くは無い又其意味を知らぬ者は極めて寡ないけれども眞に之を心から善しと思ひ之を行はんとする者は極めて寡いとは吾が申す迄も無いして見ると仁義忠孝の教は有ても間に合はぬそれが虚言と思ふ人

は日々新聞を見よ仁義忠孝の講義は久しく聞いて夫々の學校を卒業て来た人々で有りながら恐ろしい罪惡を犯し五年十年の間も人知れず経過終りの果に暴露れて累綫の恥を世に晒らす者も有る夫が偶々かと言ふに頻々に有るでは無いか此事に就ては後に尙ほ論らばねばならぬと有るが斯く眼耳鼻舌身意而已で學んだとは何にまれ道義とは全く離れて居ると云ふとが明かて有る是も道を修むる方便に依らぬから有る。

斯く説いて見ると形ある物質を知るには五つの機關と夫より出來た意が益には成るが形を離れた真心の事は所謂智力では解らぬと雖も其處に普通の仕方とは異つた方便が無くては稱はぬその方便は印度の太古から用ゐられて來た即ち禪那です去れば釋迦牟尼も只法を口で説く計では法を明かに傳へるとが出來ぬから此方便即ち禪

を弟子達に修めしむるを専ら勤められた夫故弟子の中に禪を修めぬ者として一人も無い斯なと云ふても疑ふ人は何なりとも經を閲して見るが善い禪那無くては佛の道が少しも解らず又味ふとの出來ぬと云ふとに心が付くて有ろう。

斯う云ふ理で有るから禪は禪宗に限ると思ふは全然の間違で有る然らば日本の佛の教には色々宗派が有つて禪那が禪宗以外に無いのは如何云ふ理かと尋ぬる人も有ろうこんなとは説明す迄も無いとでは有るが今の日本人には一通の事を申さずしては進んで説くとも出來ぬから已を得ず大略を申しますが日本の佛教に禪の無いものは無いのが真で有らねばならぬ夫を語すには先づ禪と云ふ名前に就て尙一言申すと有る。

前に言ふ通り佛の教を真に心に受けるにはたゞ讀み聞く丈では出

來ぬ之を授け又授かるには先に云ふ如く方便が要る佛の教とは佛の道の教で有る其教を只聞く計では開流になるのが常で有るそこで夫を聞流聞捨にせず固く心に入れて持つ續け又夫を吾身に行ふとの出來る方便が要るので有る夫故道の教は方便とは全く異つたもので有つて教は一つで有るが方便は一種では無い幾種も有ると云ふことを心得てもらひ度いそれが分らぬから宗派の争が起る禪宗では坐禪を爲る淨土宗眞宗では念佛をする日蓮宗では御題目を唱へる其外夫々の宗派でも各々異つたを爲る斯の如く異つた拜方を爲るのを見て全く法の道が違ふと思ひ互に吾宗が眞正で他のは虚妄で有ると云ひ争ふが世の常となつて居るがこれは全く教と方便とを一つのものと誤り思ふから起る誤で有る斯く色々異なる拜方を爲るは宗派々々で用ゐる方便が違ふて有るので何の宗旨の教でも皆一つの佛の道でそれに

は變は少しも無い即ち同じ道の教では有るが方便を色々にして有るので釋尊が人に依り時に依り所に依りて色々變つた方便を用ゐられた其方便を總べて禪また禪那と云ひ又三摩地とも云ひ略かめて三昧とも云ふ最も此方便は釋尊が始て思付かれたものでは無い其説かれた道こそ其當時印度に在りし仙人等の説く處とは同じからず仙人等は誤て居た故改正て前世の佛等の説かれた道に説還して教を布かれたから其當時の印度の教とは異つて居るとは申す迄も無いけれども教の方便即ち禪は釋尊より前から有つて道修むる者は皆之に依つて悟に至つたのて有る夫故婆羅門でも其教を學ぶに方便を以てした矢張それを禪と云ふて居た歟々言ひますが禪とは法や道や教やと云ふとでは更々無い教を授け又之を受る方便で有るから釋尊とても初から禪に依つて學ばれ般涅槃に至る迄獨り坐す時にも又法を説く始にも禪

に入られたとは常にして、時には法説く間にも禪に入られたそれ故に
上に申した浄土宗で念佛するは法を教へ、又學ぶ方便即ち禪で有る日
蓮宗で南無妙法蓮華經と唱へるも、之を方便として道に入るの
之れを念法禪と云ふ禪宗では坐りて心を静め公案に心向けるも方
便で矢張禪と云ふ眞言宗で梵字の阿を念も矢張り禪で有る今譬を以
て説明せば佛の道を淨らかな井の水として、さて之を飲むには如何す
るか、先づ飲む前に此水は淨かで冷かで何とも言へぬ佳味い味が有る
一口飲めば心も體も限無き楽しい思をして命は永劫も長く生きられ
死ぬると云ふとが無くなる、斯く水の功德を説くとせんか此訓を聞
く者が、只聞く計では何のとも無い、一度は口に味はんと望を起す
さて夫を飲むには如何するか、それを汲み取り、碗に盛り、手に持ち、口唇
に當て、而して之を飲むと云ふ方便を取る、其井より汲上る、方便、碗は

燒物も有れば、木作のものもある、これも飲む時に要る方便で有る、其外人に
依ては口を碗に著けず、匙と云ふ方便を用ふるもある、斯く一口の水飲
むにも色々の物をも用ゐる、手の使ひ方も色々異つた仕方が有る、それは
皆水を飲む爲めの方便で有つて、如何にでも己が勝手好き方便を取る、
是が即ち禪には色々の形が有つて、前にも云ふ如く、或は念佛もする、太
鼓も打つ、坐もする、御題目を唱へもする、珠數操りて佛名を唱へるもあ
る、約めて言へば皆方便で有つて、何れも飲むは佛の法で有る、然るに何
々宗では斯くするが、吾宗では然するが故に、彼は誤りて居ると云ふ如
き争は、誠に理無きと有る、一口に言へば何宗でも禪を行ふて居るの
で有る。

禪とは斯の如きもので有る、即ち教を受け、又授くるに要る方便で有
るから、前にも申す通り釋尊より前から行なはれて居た、又婆羅門にも

有る、今の婆羅門徒も禪を怠らぬ禪が無くては道を味ふとが六ヶ敷いからで有る抑も此禪が印度では何年の古昔に誰が發明したかと云ふに其始て行なはれたとは印度の神代の時から有る印度さんすくりつと哲學が一系統を成立てた時代より前に出来たと考へられて世界に廣く讀まる、世尊歌此世尊は釋迦牟尼より古き太古の世尊を指すの中に禪の色々異つた仕方を修行ふ者有るとが言ふて有るその通り印度では太古より禪が行なはれ、後代に至るに従て、それが益々巧みに又詳細く爲されて來た。

禪又禪那の意は前にも云へる通り「定る靜に慮る」と云ふとで有る左するには心が亂れ騒いではならぬから、禪に色々種類は有ても何れにも通れる一つの事が有る、それを心一境といふ心を一つの處に住るとです、そこで心を一つ處に住るには、何物、何事に住てもよい、此事は下

で詳に陳べましようが、心を住える爲めに佛を念ふ又神を念ふと云ふも心の亂を去るから、それが即ち禪で有るそこで神佛を祭るに色々の莊嚴儀式をするも心を静め淨らかにする爲めで矢張り禪で有る孔子が神を祭ると神居ますが如くすと説いたも此禪に稱ふて居ます。度々申す通り教が有ても之を心に染込ます方便が無くては道の味が解らしめにくいと云ふたが愈よ此方便が道の爲に要ると云ふ上は、一つの方便より多くの方便が有るを美とするは當然で有る印度では上に云ふ通り其方便の類が類て多い孔子の教では神を祠ると云ふ事は有る又支那の古今の人々が其を以て方便で有ると考へる者は無い併し神人合一となるには方便無くてはなれぬ、祭祠が即ち夫で有るか禪で有ると吾は申す、けれども此祭祠は吾言ふ如き巧徳有りと思ふ人は世に多からず、大方は只だ世人が爲すをせでは惡様に評る、

が厭さに、祭祠の式はする或は欲の願を建てる爲にするも有る前者は名聞の爲め後者は迷の爲にするので有るから如何に大々莊嚴して祭祠するとも心の淨かとなるなどの望は無いそこで支那でも日本でも孔子の教を口には喧しく言ふが心の底から孔子の道を嬉しく思ふ人は甚だ寡い斯く言へば天下の人は吾を一齊に攻撃つて有ろうが能く考てもらひ度い吾は孔子の道が悪いとも劣るとも言ふので無い又吾が孔子の道を嫌ふと言ふのでは無い孔子の道は固より善きには異論は無いが之を教ふる方便が足ぬと言ふので有る祭祠は孔子の教にも有るから前にも云ふ通り夫が禪となつて有る併し此外に方便が無いので有る佛の教では前申す通り色々ある然に孔子の教に此缺點を補ふたは實に王陽明で有る王陽明は初め佛の所謂禪を學んだので有るそれが後に儒道を唱へるととなつたが佛の教の方で修めた坐禪

の味が甘かつた教を傳へるには此方便で無くてはならぬと悟つたそこで彼は坐禪と云ふ代りに「静坐」と云ふ語を用ゐ弟子達には静坐して良知良能を悟るとを勧めた是全く禪宗でもする公案禪の外では無い上に啾々説明したから禪或は三摩地と云ふは一の宗旨では無い又それが佛の法とか道とか云ふものでも無いと云ふとが解つたで有ろうと思ひます佛の教でも孔子の教でも基督の教でも之を授くる或る方便を取りてそれに依れば教が深く心の底に染み入ることが出来るそれが禪即ち三摩地で有ると云ふのです。然らば其禪又三摩地と云ふ方便は如何なるもので有るかそれには種々異つた方式が有る何方式から入つても畢竟は同じ處に進むのです夫故時により場合により心に適ふまゝ何でも用ゐて之を行ふ間に又異つた方式に移り變へて宜ろし方式は其通り幾種も有て何れが高

禪 禪那

い低いと云ふ差別は無いが、夫を修むる人の心の持方や之を教ふる人の如何で眞の覺に至るも有れば、最も過つた又卑しい禪ともなる、それ等は魔禪とも云ふ可きものです。夫故禪を修むるには先づ清淨にして高貴き心を以てせねばならぬ。羅漢の菩薩、佛に劣るは、それが爲です。禪の方式は右に云ふ通り幾種も有りながら、高下無く皆同じ資格では有るが、其初門から一段二段と登て極奥迄登る者も有れば、中程で安んじ、それより進むとをせぬ者も有り、又初門近くで止まるもあるから、そこに禪の位に差別が生る。

次に禪即ち三摩地の方式の種類有ると及び其位にも差別有ることを示しましょう。

三摩地の方式

身體の態度

方式に依ては、今此處に云はんとする身の態度せずとも宜いが、靜に坐りて三昧に入るには坐禪の方式が有る。日本普通の坐式にても悪いとは云はぬが、膝を曲げ、脛足の上に身體全部乗せ掛けるが故に、其目方は脛足に重く懸る行儀正しき人は長い時間痛を感えず坐りも出來るが、常に其習慣無き者は暫くの内に堪え難くなる殊に日數長くは坐り續けるとはなり難いそこで結跏趺坐と云ふ坐式を爲る夫は先づ左の足を正面に延長し、其股と左下腹の關節へ右足を載せて下腹へ引寄す、又延長して有つた足を引寄せて、右股と右下腹の關節に載せ、右下腹へ引寄せる、これに因て身體の重量が脚の何部へも懸らぬから、痛を感ゆることが無い。今迄に此坐式に慣れぬ人に取ては初の間少し困るも有るが、數度試す中に極めて心持良く感ゆるに至る。次には胴を直立して脊骨を曲げぬとに心を注げる。頭首も眞直に立て、前後左右に傾かしむ可

らず又右の手は左右の踵と踵との真中の上に載せて掌を開き指を延ばし其上に左の手を載せて之も掌を開き指を延ばし兩の親指を立てて向ひ觸れ合せる口は上下の唇を閉ぢて口より呼吸の通はぬを心得舌を上腭に平く押著ける斯く舌を上著けるは咽喉と口内との間を閉塞すととなり咽喉を出入する呼吸が口中に洩れ來ぬ爲で有る出入息が咽喉を洩れて口に來るが爲め呼吸苦しくなり咬を出すのが有るから此舌を上腭に附著るとを忘る可らず次に兩眼は閉ぐ流も有るが全く閉ぢては妄心も起り易く又睡眠を催すととなるそれ故眼は半ば開き半ば閉ぢて鼻の端を視つめる鼻の端より離れて其同じ方向の地を見るも有れど鼻端を遠ざかれば眼は動き易く從て色々の亂想が生るから遠くを視ず真鼻の端を視るが最も善い坐を終りた時眼が少しかすむ如くに慣れぬ人は思ふがそれは恐る可き程の事では無

い坐禪を止めた時兩手の掌を摩り合せそれにて兩眼を按摩りて眼を開く又肩より手さき迄又身體脚部をも摩りて起立つも宜し。扱て上の如く坐禪の態度が出來たらば心を一境に集むるを努むる次に其事を申します。

繫 念

禪即ち三摩地に入るには先づ諸の雜念亂想を靜むる必要の勤で有る其亂心を治ると云ふとは最と容易く思はるゝがそれが仲々六か敷い人は朝に眼を開き夕に眼を閉づる迄は刹那も心に何事かを思ひ考へ休む間とては無い人に依ては一つの事を爲しつゝ有る間に其事の外色々の事を思ひ續けて際限が無いたとへば飯一膳食うべの間一口の飯を噛む間にも飯噛むとは殆んど心に止めず飯の味の佳不佳

副食物の味の善悪から若し今何々が副食として此膳の上の有らば一層巧味からんなど思ふ而已では無い食物より遠く離れた事に心を配り、或は今朝起りし事昨日有りし事一年十年前の事遠き外國の事友人の事さては親戚他人の凡百の事又此後の事は如何斯々の事は然々に成れば幸なり若し然らずば困るとか善かるべしとか僅に一口の飯を噛む間にも千萬無量の事に心を亂し散して食ふ物の何時咽喉を下れるやを知らぬが人の常で有る是は只だ食ふ時の一つの例を言ふた而已で有るが明けても暮れても今現前に爲しつゝ有ると而已に心を注ぐ人は極めて僅少い去ば一步を踏出して早や足の動は如何かと心には留めず行く先の事を始め萬般事物が右より左より前より後より上より下より心の中に突入り来てそれに心を取られ現在動く足は全く注意れぬそこで或時は石に躓き身は大地に倒れ或は泥溝に踏落つる

などの失敗もする若し心を今爲しつゝ有る事の上のみに注がれたならば心の亂は無く其力は寡く用ひられて餘力が多分蓄へ残さるゝので有るから心の疲勞又身の苦勞もせず爲す事は全き手際に出来上る試みに大道歩む時右に言ふ如く只だ足の動くとのみに心を注げ左足が歩み出づれば今は左足が出でたと念ひ右足が歩み出づれば今は右足が出でたりと而已思ふて歩行を續けて見よ足は早く又軽く運びて吾知らず歩行の速度が増して遠路も時短き中に經過く事を知るに至らん食物の味に不平言ふ人は試みに右申す通り一口の飯を口に入れた後舌で丸める時には今飯を舌で丸めて居ると思ひ左の歯で噛めば今左の歯で噛みつゝあるとのみに心を注げ右の歯で噛めば今右の歯で噛みつゝあると思ふて一切外の事を思はず一心不亂に食ひつゝあるを思ふて食べば何物を食べても巧妙い味となる前にも言ふた

如く象馬牛などは草や藁を食ふ見れば如何にも好味さうに食ふて居る又好味いに相違あるまい好味からずして何と一生涯迄彼等に堪へ忍ぶとが出来るか。

飯食ふとや歩むと位は何でも無い小さい事で有るとして、それ丈では無い人間が生きる限り、寝ぬ時間は何なりとも事業を爲る其時にも爲る業には心の力を入るゝと少くて爲るとの外に心を散らすが人の常で有る夫が爲め心の力を何の用益も無く徒らに消費す而已で有る。それ而已では無い人の色々の事に迷ふて遂には甚しき煩悶に苦しみ、延ては身體の病惱に攻めらるゝに至る心が常に重荷を負はず安らかで有らば何事も幸となる然かするには先づ心の亂離を靜むかくするには心を一境に住むるを習ふが最も善ひ道で有る。然らば心を一境に安んずるの仕方は如何ぞうするには念を繋ると

云ふて、何でもよい、一つの處に心を繋て外を思はぬので、上に言ふ通り食ふ時は食ふと、働く時は其仕事に心を繋ける併し是等は身が業を爲る時の心得で有る。

身を休め上に示した如く三摩地に入らんとする時は身の運動は爲さぬ前に申した通りの坐かたをして、心を何かに繋て、外に散さぬを勤める夫には色々ありて、最も吾に近きこと即ち吾身の内外部に屬して有るもの、又は吾身を離れた外のものに心を繋ける。
吾身の外部に屬くものとは鼻臍などで有る又内に屬くとは肺、胃、腸、腦の如きもの、又身を離れたる外のものとは日月山川草木神佛などの畫像木像の如きもので有る又前にも云ふた佛を念ひ、法を念ひ、又夫を口に稱ふるもそれで有る。

右等は皆坐禪の始に心の散亂を止る爲心を繋ける目的として宜し。

斯く身の内外の何物を取ても宜いが釋尊が弟子等に先づ修めよと示めされたるは安那般那に念を繋けることで有ります因て以下に先づ安那般那念より説始めましょう。

安那般那念 Ana-apana.

これは禪の方式の一つです入息出息のところで支那では略めて經文に安般とも書いて有るそれは念入れる三摩地です此禪方式は凡ての方式の中最も平易で何も持たず場所も構はず誰でも修むるの出来る式ですそれ故凡夫から上菩薩佛に至る迄用ゐる式で有ります餘り手輕な方式で有るから輕蔑する者が有る六ヶ敷い公案を人間普通の道理で悟らんと苦しみ長の年月坐りても少しも悟の香も嗅ぐとの出来ぬ者も多く有るが今此處に説く方式に依れば誰でも容易く定に入ると

が出来ます尤も定には淺きも有り深きも有るがその事は後に申しま
す此安那般那を修むるに二つの仕方が有る次に陳べます。

數 息 (安那般那)

上に云ふた通りに坐りて鼻より靜に細く息を吸入れ其息の鼻を經て咽喉に至り胸を通り腹を過ぎ下腹の底迄吸入れる心持で下腹を張り出す如くにする其間心を入息に注ぎて何事も思はず只管入息の事のみを思ふ坐る前に帶其外下腹の周圍に纏へる紐衣服を緩め置き下腸の縮らぬ心に心掛ける可しさて次には下腹より上の方へ靜に細く出で行く出息の道路に心を注ぎ下腹より腹腹より胸胸より咽喉咽喉より鼻へと移り行く息を觀つめて鼻より吹出す此入息と出息とを一つと數へ次に又右の如く入息に心を注げ出息に心を注げて二つと

數 息

數ふ斯く息の出入を繰返して十と數へたらば次に又先の如くにして一つより始めそれを積んで十とし前の十と合して二十とする斯く數を誤り無く積み上げて百に至り千に至り尙其上に至る數を數へ誤れば今迄數へ來たる數を振棄て、更に一より始む出息入息を二つとするも宜けれども餘り煩はしき故、矢張出入を一つに數ふるが爲易し右の如く只息を思ひ之を數ふると云ふ業は如何にも小兒の戯の如く思ふ人も有るべしけれども此小兒心に成るとが極めて平易く見えて其實は夫ほど爲し難いとは無い少し其事を申しませう。

人は熟睡する時を除く外、心の中に何か思はぬ時は無い一つの事を爲る間にも、其事のみを思ふて爲るとは甚だ稀で人に依ては一つ事を爲るに其一事而已に心を注いで、外の事を些も思はぬ心になるとの出來ぬ者が有る又云ふ心は賢い心で、人は一事を爲る間に、外の事を幾個

も思ふ力無くては此多忙い世を渡るとは出來ぬと論ふ人が有るこれは大なる過で有ります此云ふ心では眞面目な事は出來ませぬ斯の如き心の人は、明けても暮れても獨り多忙しがりて心に苦の絶ゆる間は無い一心不亂と云ふとは善い心掛で有るとは誰も知て居るそれは心を忙しく使ふと云ふとは無い一つの事に心を注ぎ少しも外の方に心を向けぬと云ふので有る三摩地は其處に在るので心一境に有と申すは其事です定に入るとは心が一つに凝りて定まるのです夫故定に在れば眼も耳も鼻も口體の働も全く止まつて仕舞ふ五官は心を亂れしめ騒がしむそれ故五官が活動いて居る間は心の静は有りません五官を斷絶りて始て眞の心が眞の働をするに至るのです。右に云ふ如く出入の息を數ふる間に色々様々の事が心の中に生るそは皆雜念で有るからそれ故息に心を注ぐので有るが佛は修習多

修習と教へられた時たまに修めるでは機能が無い日々之を修むれば追々早く心が静まるとなつて亂想も生るゝが少く成て行く。

隨 息(安那般那)

亂想が甚しき時は右に云へる數息が最も宜し心少しく定り數息が煩しくなり心に之を厭ふ時には數ふるを止めて只息の出入にのみ心を注ぎ息長き時には今此息は長しと觀知り若し息短き時には今此息は短しと觀知り若し息冷なれば今此息は冷なりと觀知り若復息暖なれば今此息は暖しと觀知り又息有る時は息有りと知り息無き時は息無しと知る斯くして心静まれば事物を憂ひ苦しむ心は消滅せて安樂な境涯に入ります。

世尊安那般那を教ふ

安那般那の事は上に申す如くにして修め行ふのですが安那般那の色々に異つた爲かたが有ります念佛が羅雲と云ふ弟子に教へられた此法を次に掲げます。

尊者羅雲心中に今云何にして安那般那を修め行ひ愁憂を除き諸の想の無きに至る可やと念ひ斯く考へて羅雲即ち坐より起ち便ち世尊の所に往き參り頭を下げて世尊の兩足を禮い一面に在て坐る須臾退き坐りて世尊に白して曰く云何安那般那を修め行ひ愁憂を除き去り諸の想を退ぞけ大きな果報を獲て甘露の味を獲るとが出来ましようかと世尊告て曰く善哉善哉羅雲や汝それ能く如來の前に師子吼して此の如き義を問へり如何して安那般那を修め行ひ愁憂を除

世尊安那般那を教ふ

去り諸の想有るとなからしめ、大いなる果報を獲て甘露の味を嘗む
 きかと汝今羅雲や、諦に聽け、諦に聽け、善く之を思念へよ、吾當に汝の爲
 に具さに分別説すべし。對へて曰く是の如し。世尊、爾時尊者羅雲は世尊
 より教を受く。世尊告て曰く、羅雲や、比丘有りて、閑靜なる人無き處を樂
 み、身を正しくし、意を正しくして、結跏趺坐わり、他異念す、意を鼻頭に繋げ、出
 息長きは息長と知り、入息長きは亦息長と知り、出息短きは亦息短と知
 り、入息短きは亦息短と知り、出息冷なれば亦息冷と知り、入息冷なれば亦
 自冷なりと知り、出息暖なれば亦息暖と知り、入息暖なれば亦息暖と知
 り、身體を盡く觀て、入息、出息、皆悉く之を知る時、有て息有り、亦復その有
 るを知り、又時に息無し、亦復その無きを知る若し、息心に從ひ出れば亦
 復心に從ふて出づと知り、若し、息心に從ふて入れば亦復心に從ふて入
 ると知る、是の如く羅雲能く安那般那を修め行ふ者は、則ち愁憂や惱亂

る、想は無くなり、大なる果報を獲て、甘露の味を得と。世尊は斯具に微
 妙なる法を説き、玉ひ已ぬ。羅雲即ち坐より起ち、佛足に禮を爲し、三回遶
 りて、去て安陀園に往き、一樹の下に在て、身を正し、意を正して、結跏趺
 坐りて、他餘念無く、心を鼻頭に繋げ、出息、入息を世尊に教へられた通り
 に修め行ふ。爾時羅雲、欲心、便まち解て脱去り、復衆の惡き心も無くな
 りて、尙ほ覺事物を廣く尋ね知らんとする心、觀事物を深くさぐり細か
 に識り別ける心は、尙取去ればせぬが、喜び安んずることを念ひ掛けて
 初禪に遊び、次には覺觀ともに息みて、心の内に自ら歡喜び、其一心を專
 らとし、覺觀無き三摩地に入り、喜を念ひて、第二禪に遊ぶ。次には復喜の
 念も無くなり、自ら守つて、他何事をも思はず、只だ身に樂きを覺る、是は
 諸の賢聖が常に求めて護る處を樂み、念ふて、第三禪に遊ぶ。彼は既に
 苦も樂も滅て復た愁憂も無く、只清淨を護り、念て、斯く、第四禪に遊べり。

世尊安那般那を教ふ

彼は此三摩地を以て心清淨かに塵穢無く、身體柔輭かにして其何より來れるやを知り、己は本何を作せるやを憶え出して、宿命に經る無數劫の事をも識り、我は曾て何某の家に生れ、名は某姓斯々の食者を食べ、此々の苦樂を受け、壽命は長かつたとか短かつたかをも知る、彼此三摩地の心清淨なるを以て、心に瑕穢無く、衆生等の生者逝者の善か悪いか、美しいか醜いか、其行ふ處、作す處を觀きて、實の如くに之を知る、或は衆生有り、身に惡を行ひ、口に惡を行ひ、意に惡を行ひ、賢聖を誹謗し、事物を見るも邪見を爲し、身壞れ命終りて地獄の中に入るを知り、或は復衆生有り、身に善を行ひ、口に善を行ひ、意に善を行ひて賢聖を誹謗らず、恒に凡ての事を正しく見、身壞れ命終りて、善き天原に生るなど、皆實の如く之を知る、更に物施す意も起り、煩惱は泯果て、既に苦を解脱れ、生死無くなり、阿羅漢となる、是時尊者羅雲已に阿羅漢と成つて、便まち禪の

坐より起ち、更に衣服を整へ、世尊の所に往たり、顔面にて禮足を爲し、一面に在りて世尊に曰て曰く、求むる所は已に得て、諸の心の漏れなやみ、くるしみ、むさぼり、いかり、うたがひなどを水の漏れるに譬ふも、除き盡したりと、其時世尊は諸の比丘に告て、羅雲は諸の羅漢の中、羅雲第一と説き玉へり云云。

世尊諸の比丘に告て、安那般那を念ふことを修め、習と曰へり云云、善く其身を護り、諸の根門(眼耳鼻舌身)をも守り云云、林の中の閑房、或は樹下、或は空露れたる地に入り、端身正しく坐り、念を面の前に繫け、世に有る一切事物を貪り愛る心を斷ち切り、欲思を離れて、心を清淨に持ち、瞋恚睡眠、掉悔、疑惑を斷き、諸の善事に於ては心に堅く定て、煩惱を起さず、慧力を鈍らして、涅槃(さと)りに趣かれぬ如き障礙を遠ざけ、離れて、内に入る息に念を繫ぎ、善くそれを學び、外に出る息に念を繫ぎて善

世尊安那般那を教ふ

くそれを學び、息の長きにも、息の短きにも、一切身の入息を覺知り、一切身の入息に於て善く學び、一切身の出息を覺知り、一切身の出息に於て善く學び、一切身で行息には入息を覺知り、一切身行息には入息に於て善く學び、一切身で行息には、出息を覺知り、一切身の息には、出息に於て善く學び、喜を覺知り、樂を覺知り、心行を覺知り、心行の息には、入息を覺知り、心行の息には、入息を覺知るとに於て善く學び、心行の息には、出息を覺知り、心行の息には、出息を覺知るとに於て善く學び、心を覺知り、心の悦を覺知り、心の定を覺知り、心の解脱時の入息を覺知り、心の解脱時の入息を覺知るとに於て善く學び、心解脱時の入息を覺知り、心の解脱時の出息を覺知るとに於て善く學び、一切法の無常を覺知り、入息滅るを觀、察へるに於て善く學び、出息の滅るを觀、察へ、出息の

滅るを觀、察へるに於て善く學ぶ是を安那般那を念ひ、身止息、心止息、覺も觀、も寂滅て純一となる云々。

念佛 觀佛

念佛と云ふ語を解くに文字の通り佛を念ふ意味と、今一つは佛の名を稱へると云ふ意味の二つに解かれる佛を念ふとは心に念ふとて、心に念ふには心の眼に佛を觀ると云ふとに通ふこれも心が亂れて居ては出來ぬ心を靜めて心の眼に佛を觀るとを勸むるので有る佛を觀るにも觀方が有る佛の大智慧、大慈悲を念ふと、又佛の姿を念ふとで有る佛の名を口で稱ふるも、數多度稱ふる中に、亂れた心が佛に向けられるととなり、心一境の狀になりて三摩地に入るのて有る木魚や、鉦を打續けるも心を夫に移し、外を思はず三昧に入る方便で有る。

念佛 觀佛

佛の性來を言へば中々六ヶ敷なる前に佛心眞如の處で申した如く
 有るから本來は形相は無、宇宙に充滿る靈心で有る夫故其は一切
 處一切事物に透徹りて有るから形を以て云ふとは出來ぬ然れども無
 邊廣大の無相きものを人の心に思ひ觀るとが出來ぬから假りに相形
 を之に與へて觀るさて如何な相が善かるべきかと考へて見よ人の知
 る諸々の形と言はい、圓いとか角るとか球形卵形を始とし山川木草禽
 獸魚貝の形も有るが此等の何れかを取て假に佛の相とするとは人の
 心には稱はざるべし先人間は萬物の靈と自ら誇て言ふて居る此考は
 甚だ我慢の沙汰では有るが去連人間が人間以外の物を以て人間の貴
 ぶ者の代表にするにも及ばぬ野蠻の代には樹木や魚獸を神若くは神
 の代として嵩めたも有るが先づ人の相有るもので人に優れたものゝ
 代表とするが正當と人は思ふ然るに人以上の威力を尋常の人相で表

すとは物足らぬとは言ふ迄も無いそこで大體は人相で有るが佛と云
 ふ上は人に優れた著るしい處が其相の中に無くてはならぬと思ふも
 凡人には免れぬ於佛の相には普通の人の持たぬものが體に屬て
 有るとする先づ眉と眉との間に白毫が有りそれが右へ圓く旋轉り常
 に光明を放つと云ふとを始とし足には千輻輪が有りて普通の人には
 無き三十二相を有ち其上身體に好き點が八十種有るとす如何にもそ
 云ふ相が有らば凡人以上の力の代表と見るに足る釋尊其外釋尊より
 前の諸佛も皆な右の相を備へて居られたと云ふ斯く云へば當世の
 人は一口に迷信で有ると云ふで有ろうが能く考へて見れば全くの虛
 妄では無いと思直ほすとも出來よう佛はさて措て普通の人の中ても
 悪心無き善人賢者の相貌は其心性を表明して居る去れば芝居に顯は
 れる人の相貌が夫々異つて善悪が一見に解る様にするでは無いか心

の如何が容貌に表はれて有るとは幼兒にも知られる心に哀しと思はば顔が泣く心に怒れば顔が怒る心に慈愛有らば顔も温和になる去れば宇宙の廣きに等しい慈悲と智慧との真心が顔の姿に顯れぬとなど有るべき。

斯く佛の相を觀て、それを一心に念ひて心の眼に作り出す然し心亂れて静まらず、殊に慾惡心我と云ふ心など強く有る間は、上に云ふ如き佛の相は見えずして、惡鬼、羅刹の如き相が眼に映つる清淨にして無垢き心を以て、一切欲望を打棄て、たい慈悲の一心を堅めて佛を思ふ之も修習多修習に依て追々と分明に觀るとが出来るその時は佛と吾と一體に成ると思作して三昧に入る。

此觀佛とは淨土宗及び眞宗で依經とする三部經の一、觀無量壽經に詳しく示してある觀無量壽經とは阿彌陀如來を觀る經と云ふとであ

る。

此經の起原は王舍城と云ふ都の王頻婆婆羅の太子阿闍世と云ふが父王を七重の室内へ閉込めたが、大夫人韋提希密に其室に忍び、王に飲食物を奉りたるを、太子聞て又夫人をも他の室に閉込めた夫人は釋迦如來を祈り、弟子阿難を遣はし慰め下されと頼んだが、釋尊之を知り、大目犍連と阿難とを先づ送り、自らも亦た室に行きて法を説き、阿彌陀を觀る方法を教へられたのが大略の話で有る而して佛を觀る下準備として先づ日輪を觀ることを説かれた。

日想觀 水想觀

日想觀 其時佛は韋提希に告玉はく汝及び衆生應に心を専らとし、念を一處に繫け、西方を想ふべしいかい想を作すやと云ふに、凡そ想

日想觀、水想觀

を作すとば一切衆生生れつき盲に非ずして目有る徒は皆日没を見る。そこで想念を起し、正しく坐りて西に向ひ日を觀るべし、心を堅くそれに注げて想を専らにし、外に移らざらしめ、日の没らんとする狀の空に懸る鼓の如くなるを見よ、既に日を見已らば目を閉ぢても、目を開いても皆明了に日を見るその出来る如くにせよ、是を日想と爲し、名て初觀と曰ふ。

次に水想を作せ、水の微清なるを見、明了として分散意無からしめよ、既に水を見了らば、當に冰想を起すべし、冰の映徹るを見て、瑠璃想を作せ、此想成し已らば瑠璃地の内外映徹たるを見、下には金剛七寶の金の幢有りて瑠璃地を擎げたり、其幢は八方八楞具足り、一一の方面は百の寶を以て成り、一一の寶の珠に千の光明有り、一一の光明は八萬四千の色有り、瑠璃地に映りて億千の日の如し、具には見る可も有ら

す、瑠璃地の上には黄金の繩以て難廁間錯り、七寶を以て其界とす、分齊分明にして、一一の寶の中には五百色の光有り、其光は華の如く、又星月に似て虚空に懸り、光明臺と成る樓閣千萬にして、百の寶を合せ作る。臺の兩邊には各百億の華幢有り、かず無量樂器を以て莊嚴を爲し、八種の清風光明より出で、此樂器を鼓つに、其音は法の道を説く、是を水想と爲し、第二觀と名く。

これより次ぎ次ぎに觀想、仕方を進め、終には阿彌陀佛觀世音菩薩大勢至菩薩を觀る方便を教へ、又次ぎには自心を起して、西方極樂世界に生れ、蓮華の中に結跏趺坐して、蓮華の合ひ又開く想ひ爲すとを教へ、極樂に生れんと願ふ者の心得を示し、それに上下九段に分けて、始より終迄を十六の觀想が説いて有る。